

国際理解・国際平和教育としての 『オリンピック教育』

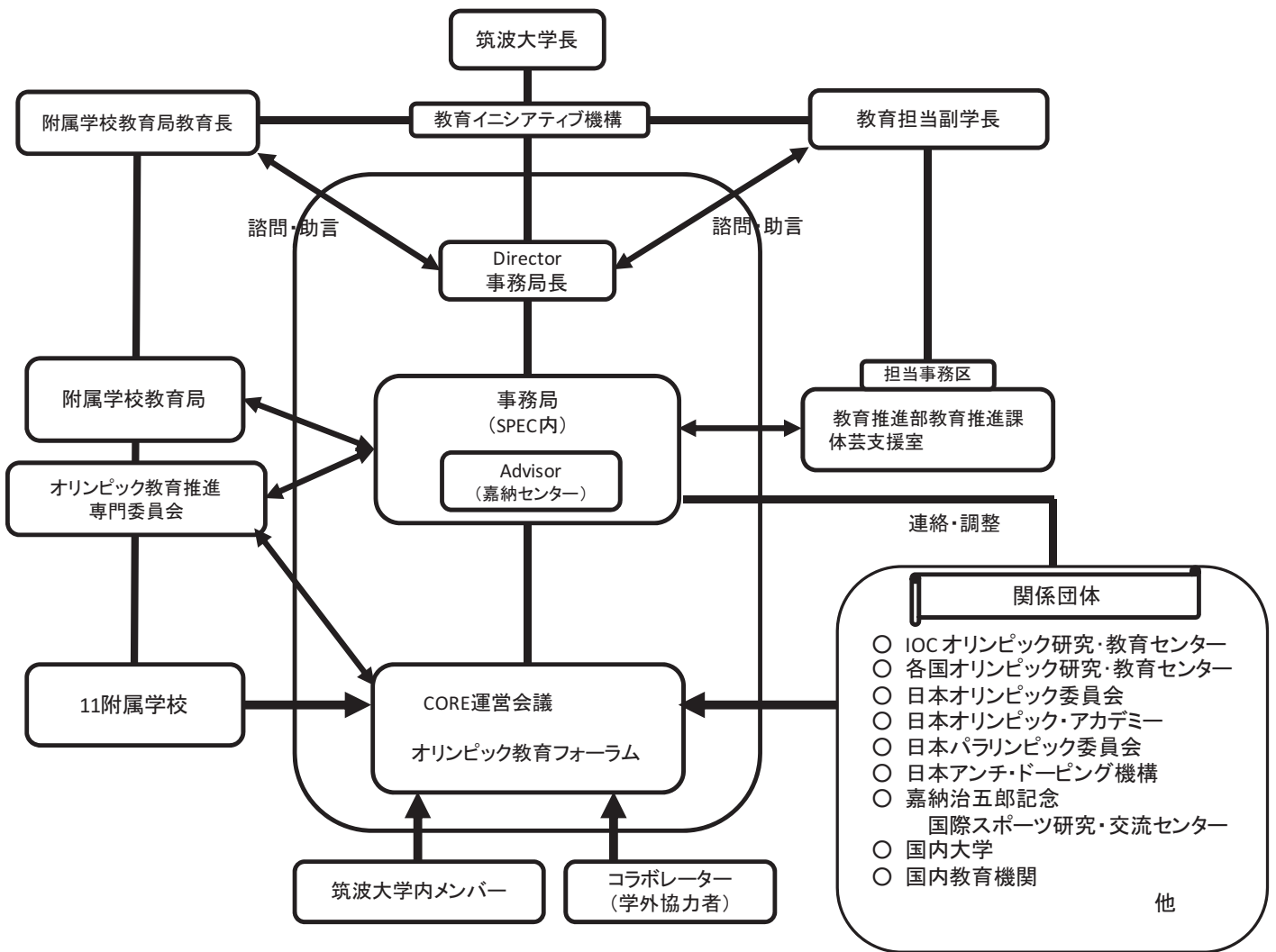
—Excellence（卓越）・Friendship（友情）・Respect（尊敬）—



2012年3月

筑波大学附属学校教育局

附属学校オリンピック教育推進専門委員会



筑波大学オリンピック教育プラットフォーム (CORE : Centre for Olympic Research & Education) 組織図

表紙写真は、次のようである。

上段左が「全国障害者スポーツ大会に出場する附属桐が丘特別支援学校の生徒」

上段右が「パラリンピック閉会式の様子」

下段 が「国際ピエールド・クーベルタン・ユースフォーラム参加の様子」

目 次

はじめに

(附属学校教育局教授 坪田 耕三)	2
1. オリンピック教育の推進	
(附属学校教育局教育長 東 照雄)	3
2. 国際平和教育としてのオリンピック教育を求めて	
-大学と附属学校の連携を通して-	
(前筑波大学理事/前附属学校教育局教育長 阿部 生雄)	4
3. 「オリンピック教育」とは何か	
(体育系教授/CORE事務局長 真田 久)	8
4. 「オリンピック教育」の実践	
-大学と附属学校の連携による体育理論の授業-	
(体育系助教/筑波大学附属高校教諭 宮崎 明世)	13
5. 「国際ピエールド・クーベルタン・ユースフォーラム」に参加して	
(附属高等学校教諭 中塚 義実)	19
6. パラリンピックに感じること	
(附属視覚特別支援学校教諭 寺西 真人)	33
7. 各附属学校における「オリンピック教育」	
(1) 附属小学校 (鷺見 辰美)	37
(2) 附属中学校 (長岡 樹)	38
(3) 附属高等学校 (中塚 義実)	40
(4) 附属駒場中・高等学校 (横尾 智治)	42
(5) 附属坂戸高等学校 (平田 佳弘)	48
(6) 附属視覚特別支援学校 (寺西 真人)	49
(7) 附属聴覚特別支援学校 (苦瓜 道代)	53
(8) 附属大塚特別支援学校 (遠藤 絵美)	55
(9) 附属桐が丘特別支援学校 (花岡 勇太)	56
(10) 附属久里浜特別支援学校 (松本 末男)	59
8. オリンピック教育エッセー	
(1) 「オリンピックがオリンピック教育に取り組む意義」	
(体育系准教授/オリンピック 山口 香)	61
(2) 「ユースオリンピックから感じたIOCの新しい取り組み」	
(体育系准教授/オリンピック 河合 季信)	63
(3) 「オリンピック教育について」	
(体育系准教授 高橋 義雄)	65
9. 「オリンピック教育講演」	
(前広島市長 秋葉忠利氏：筑波大学附属学校卒業生)	66

はじめに

附属学校教育局教授 坪田 耕三

筑波大学附属学校における「オリンピック教育」の推進については、前教育長、阿部生雄先生の発案で準備が進められ、現教育長、東照雄先生のもとに、平成24年度、新たに「附属学校オリンピック教育推進委員会」が発足しました。

大方の人は「オリンピック教育」って一体何だろうと言いました。また学校の仕事が増えるのではないとも言いました。しかし、国際教育の一貫に位置付けられるものでもあり、国際平和教育としても考えられるものであることが徐々にわかってくると、何とかこれを実現していけば、また、新たな視点から附属学校が一体となって前進できるのではないかと思えるようになりました。「オリンピック」という文言が付いていると、競技としてのスポーツばかりが浮かびあがってきますが、国際教育・国際平和といった視点、また、パラリンピックといった視点、あるいは知的な面から数学オリンピックや生物オリンピックなどまでも、考えようによっては一体化して附属学校の中で一緒に考えられてもいいのではないかと夢が膨らみます。現在のところは、活動範囲が限られていますが、将来的には、もっと大きな視点を持つことを望みます。筑波大学附属学校ならではの活動があってもいいのではないかと思います。

阿部先生が、附属中学校長時代に生徒に話されたことが一冊の本にまとめられています。「みなさん、こんにちは－向上心への呼びかけ－」（2008年、図書文化）です。私はこの本が好きで、ここにスポーツマンシップについて語られたことが載っています。本委員会に大いに役立つのではないかと思います。一部を紹介してはじめての言葉とします。

「…スポーツマンシップ・ブラザーフッドは、1928年に正式にニューヨークで結成されたのです。その設立趣意書には、次のような三つの点が指摘されています。

第一は、「真の人格の高さは、どのように勝利するか、どのように敗北を受け入れるかに現れるのであり、単に勝つことにあるのではない。スポーツマンシップとは、労働の恩恵と遊戯の喜びを高めるその資質のことである。」とし、そうしたスポーツマンシップを世界中に広げようとする。

第二は、人類、個人、国家、国際という次元のすべての活動において人生のゲームをフェアに行うよう奨励すること。

第三は、スポーツマンシップの規範を、①ルールを守る、②自分の仲間との信義を保ち自分のチームのために正々堂々と競技する、③体力をつける、④自制心を保つ、⑤卑怯なことをしない、⑥勝ってもうぬぼれない、⑦潔く敗北を受け入れる強い心を保つ、⑧健康な身体に健全な魂と清らかな精神を保つ、という8項目で提起したこと。…」(pp.274-275)

この報告書は、オリンピック推進委員会の初年度のものであり、ご寄稿いただいた先生方に深く感謝するものであります。これを初めの一歩として、少しずつ発展していくことを期待するものであります。

1 オリンピック教育の推進

附属学校教育局教育長 東 照 雄

2010年12月10日、大学会館の広場に立つ嘉納治五郎像除幕式と期を同じくして、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が正式に発足した。オリンピック教育という用語から何を思い浮かべるかは人により異なるようで、まだまだ、一般に共通した概念として浸透していない現状と言わざるを得ないかもしれない。私も、本用語に最初に触れた際、オリンピックの歴史や各種競技の教育に関する教育かと単純に思っていたが、2011年12月4日に開催された「オリンピック教育国際シンポジウム2011：アジアにおけるオリンピック教育」に参加して、オリンピック教育に対する認識が一変した。また、同シンポジウムで、2011年8月13日から21日にかけて、北京第4中学校で行われた第8回「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」に筑波大学附属高等学校の生徒2名が同校の中塚先生と共に参加した報告を聞いて、さらに認識が変わった。

おそらく、一般的な理解としては、第1回オリンピック教育研究会の報告書（CORE事務局、2011）にもあるように、概ね次のようなことを学ぶと考えられていると思う。つまり、①オリンピックの歴史、価値、競技、ルール、アスリート等について学び、②オリンピックを通して、付随的に開催都市の文化に触れたり世界の様々な問題を学んだり、③スポーツが持つ社会的・教育的価値について学ぶことと考えられていると思う。しかし、COREでは、筑波大学の前身である東京高等師範学校の校長であり、日本柔道を世界に広めた嘉納治五郎先生の「精力善用」「自他共栄」の精神を加えて、教育実践に活かしていくことを基本方針としている。つまり、オリンピック教育の普及・促進を通して、人間の可能性を真実心や国際理解の心を身につけ、平和な国際社会の構築に貢献することを大切にする人材養成をすることを理念として掲げている。COREでは、オリンピック教育を通じた国際理解・平和教育の推進、②教育実践モデルの開発、③オリンピック教育・研究に関する情報収集および発信、④国際的な視野を備えた人材養成を目的として活動している。

さて、上記のCOREの活動目的は、未来に向けてどのように充実・展開して行くのが良いのだろうか。様々な意見がすぐに聞こえてきそうであるが、その答えは、上述の「オリンピック教育国際シンポジウム2011：アジアにおけるオリンピック教育」に端的に表れているように私には思える。日本におけるオリンピック教育は始まったばかりであるが、シンポジウムで話題提供頂いたシンガポール、タイ、台湾、韓国などアジアのオリンピック教育は既に社会的な広がりを見せており、その歴史とともに各国の現状と課題に学ぶことが肝要である。各国の間では、直面する現状と課題に関する内容は多少なりとも異なるが、むしろ大事なのは共通する点に注目することである。つまり、オリンピックとオリンピック教育の普及のために、国内のオリンピック関係機関の協力の下、学校教育の中に位置づけて行こうとする動きである。日本では、既に、筑波大学附属高等学校におけるオリンピック教育推進のためのカリキュラム開発等の先導的試みがあり、附属学校全体として、このようなムーブメントをさらに大きなものにしていくために、近々、附属学校教育局が主催したシンポジウムを開催してはどうだろうか。

2 国際平和教育としてのオリンピック教育を求めて —大学と附属学校の連携を通して—

前筑波大学理事／前附属学校教育局教育長 阿部 生雄

はじめに

私がオリンピック教育に関心を持ち始めたのは、2001年から3年の間、IOC 附属オリンピック・ミュージアムの嘱託の研究者として、年に数度、スイスのローザンヌでオリンピック関連研究に対する補助金を選考する機会を持った頃からである。他の研究者たちとの話の中で、オリンピック研究の促進と同時にオリンピック教育の必要について話がしばしば及んだからである。そんな折、2003年4月に筑波大学附属中学校の校長を拝命したのであった。附属中学校には「校長訓話」の伝統があり、スポーツやオリンピックの話題を「訓話」の重要な話題の一つとして導入しようと試みた。毎年数度は、スポーツマンシップやオリンピックに関する話題を生徒たちに持ちかけるのが習慣となった。こうした「校長訓話」の経験を、2008年11月に北京大学で開催された34Beijing Forum 2008で講演した。2009年4月に理事・附属学校教育局教育長となり、多様な校種からなる附属学校と様々な学問領域を持つ大学との連携教育を推し進める一環として「オリンピック教育」を導入しようと努めたのである。附属学校教育局教育長として考えてきたオリンピック教育の一端をここで振り返ってみることにする。

1. オリンピック教育とは

オリンピック教育とは、国際オリンピック委員会（IOC）が掲げるオリンピズムの理念と、それが展開しているオリンピック・ムーブメントを、国際平和と若者の教育に活用しようとする教育である。その核心となるオリンピズムとは、オリンピック憲章の根本原則において「肉体、意志と精神の全てにわたる資質を高め、調和をもたらそうとする人生の哲学である。スポーツに文化と教育を取り入れることにより、オリンピズムは、努力に基礎付けられた喜び、よき範例を持つ教育的価値、そして普遍的・基本的な倫理原則への尊敬に基づく生き方を創造しようとする」ものとされる。オリンピズムは単なる「競技精神」ではなく、より広義に「努力」によって教育的・倫理的な向上をもたらそうとする教育原理であり、向上心の「人生哲学」であるといえよう。

また、オリンピズムはそうした個人の修養的価値にのみ収斂するのではなく、より広く国際平和に寄与する理念でもある。同じくオリンピック憲章では「オリンピズムの目標は、人間の尊厳を保つ平和な社会を作り上げるよう奨励することにより、至る所でスポーツを人間の調和的発達に役立つようにすることである」とし、あわせて「オリンピック・ムーブメントの目標は、いかなる差別もなくスポーツを行うことを通して、また友情、連帯とフェアプレーの精神による相互理解を必要とするオリンピック精神において行われるスポーツを通じて、若者の教育によって平和で、よりよき世界を建設することに寄与することである」として平和な世界を建設することを最終的な目標としている。若者の国際平和教育のためにオリンピズムとオリンピック・ムーブメントは理念化され、プログラム化されているといつてよいであろう。

2. 世界におけるオリンピック教育

既に、世界のいくつかの大学や機関では「オリンピック研究センター」（以後 OSC）を設置し、IOC や各国のオリンピック委員会（以後 NOC）と連携して「オリンピック教育」（Olympic education）に取り組み始めている。主なものには次のような大学や機関がある。

① LA84 Foundation (LA, USA)

1984年のロス・アンジェルスでのオリンピック大会からの基金で作られ、1985年以來2007年まで、AAF（Amateur Athletic Foundation）として機能してきた。現在、1000スポーツ団体に基金を提供している。LA Foundation には「Olympic Information Center」があり、そのホームページから、オリンピック入門、オリンピック公式報告書、オリンピック・カリキュラム・ガイド、オリンピック・オーラル・ヒストリー等が参照できる。

② International Centre for Olympic Studies (Western Ontario Univ., Canada)

1989年にオリンピック研究センターとして世界で始めて設立された。カナダのウェスタン・オンタリオ大学にあるオリンピック関連の研究機関で、国際誌「Olympika」を発行、国際シンポジウムを開催、世界的なオリンピック関連の研究者による講演を組織、資料収集を重要な機能としている。

③ Olympic Studies Centre (Universitat Autònoma de Barcelona, Spain)

1992年のバルセロナ・オリンピックに向けて、1989年にバルセロナ自治大学に設立された。国際的なオリンピック・ムーヴメントや、国内・国際の組織の学問的、科学的、文化的な分野と提携してオリンピズムやスポーツの人文的、社会科学的研究を行っている。

④ German Sport University Cologne

ドイツのケルン大学に付属しており、俗称カール・ディーム・オリンピック研究所と呼ばれる。1936年のベルリン・オリンピックの事務局長、ディームの収集したオリンピック関連資料が豊富である。

⑤ IOC Olympic Studies Centre

ローザンヌのIOC 附属オリンピック・ミュージアムにあるセンターで、オリンピズム、オリンピック・ムーヴメントの普及とそのための出版を計画し、また若い研究者のオリンピック研究に対して奨学金を提供している。1993年6月に設立された。

⑥ Centre for Olympic Studies & Research イギリスのラフバラ大学に付属している。ロンドンオリンピック大会のための競技力向上に関する研究や、オリンピズムやオリンピック・ムーヴメントの普及とアカデミックな研究を促進することを目的としている。BOF や Uksports（連合王国の主に競技力向上のための連合組織）等の様々な組織と連携している。ゼミや会議や出版を通じてオリンピズムを普及している。2004年7月に設立された。

⑦ Centre for Olympic Studies (Sydney, Australia)

オーストラリアのオリンピック研究を重視している。2005年10月に設立された。研究、出版、文献情報学、データベース構築に力を入れている。

この他、北京体育大学等にもオリンピック研究センターがあり、2008年の北京大会に向けてオリンピック研究とオリンピック教育を促進した。第1回ユース・オリンピックを開催したシンガポールやソチ冬季オリンピックを控えた韓国でもオリンピック教育が取組まれており、こうした機関やセンターが世界各国で開設され始めている。オリンピック教育は、こうした研究機関が世界平和に向けて連携することによって初めて展開できると思われる。最も重要なことは、オリンピック教育の内容の構築と、理論と実践の深化をはかり、定期的に国際的な交流を深めることであろう。

3. ユース・オリンピック・ゲームズ

スペインのCEO-UAB（バルセロナ自治大学オリンピックセンター）は、2006年にIOCによってオリンピック教育イニシアチブの国際的研究を委託された。またIOCは、2007年にユース・オリンピック・ゲームズ（YOG）を新たに開催することを決定し、第1回夏季大会は2010年にシンガポールで開催された。また、ついこの間にはYOGの第1回冬季大会が2012年1月にインスブルックで開催された。YOGの特色は、14歳から15歳、16歳から18歳のエージグループで競い合う方式で競技至上主義を緩和し、文化プログラムを通じた国際教育の場という側面を重視するところにある。「マルチ・リンガル、マルチ・カルチュラル、マルチ・エージ」がこのプログラムの狙いであるとされ、テーマは「Learning to know, learning to be, learning to do, learning to live together」である。8歳から18歳の若者を対象とした新たな国際教育プログラムの一部であるYOGと連動して「オリンピック・ヴァリューズ教育プロジェクト」(Olympic Values Education Project)を開始している。現在、IOCは三つのオリンピック・ヴァリューとして“卓越、友情、尊敬”(Excellence、Friendship、Respect)をあげ、スポーツを通じて取組む6つの活動課題を提起している。その課題とは、①スポーツ・フォア・オールによる万人のためのスポーツ、②スポーツを通じた人間を第一とする発達、③身体、意志、精神の発達を導くスポーツを通じた教育、④女性のスポーツ参加の促進、⑤競技者間の友情によるスポーツを通じた平和の創出、⑥貴重な資源を保護するスポーツと環境、ということを重視している。オリンピック教育の内容はこうした動向を反映させる必要がある。

4. 筑波大学とオリンピック教育

平成21年、附属学校教育局も、筑波大学の第二期中期目標・中期計画に係る大学全体の年次別実行計画の中で、平成22年度と23年度に「大学と連携し、小学校教員養成課程を含む教師教育の充実及びオリンピック教育の実施を検討」するとし、重点施策として「大学と連携し、附属学校の児童生徒を対象とする国際平和教育としてのオリンピック教育の実施を検討する」ことを掲げた。上記の中期計画に基づき、11の附属学校と大学との連携、そして小中高大一貫で、国際理解教育としてオリンピック教育を推進することが構想された。具体的な事業としては、①オリンピック、パラリンピアンへの講演会、②オリンピックの歴史や意義や形式に言及した副読本を用いた総合的な学習、③大学の教員、オリンピック、パラリンピアンによる出前授業、④体育専門学群の学生による運動部や課外活動の指導、⑤オリンピックによる地域社会の人々を対象とした公開講座、⑥オリンピック教材、テキストの作成、等に取り組むことになった。こうした事業を計画的、継続的に行うためには、オリンピックに関する研究と教育のための中核的な機関を大学に設置しなければならないという計画にしなければならなかった。筑波大学におけるその取組みの経緯を見てみよう。

5. CORE 設立までの経緯

2009年6月、筑波大学は東京都の2016年夏季オリンピック・パラリンピック大会招致活動を支援する決定した。この支援活動は、オリンピック教育への取組みにおいて一つの重要な契機となった。残念ながら本学の河野一郎教授が事務総長となったこの招致活動も、10月2日のコペンハーゲンでのIOC総会で落選となった。しかし、10月19日にはチュニジアから招待した元大統領でIOC委員の故モハメド・ムザリ氏の「政治家、オリンピック・ムーブメントの指導者としての経験を語る」と題する講演会が組織された。400名近くの聴衆を引き付け、貴重なオリンピック教育の先例となったと思う。

2016年東京オリンピック招致が不成功後、2020年広島・長崎オリンピック招致や2020年ヒロシマ・オリンピック招致の推進と挫折、2020東京オリンピック招致の立ち上げと、オリンピック招致をめぐる日本の関心は高まった。また、2009年8月には民主党への政権交代と民主党政権が推し進めたスポーツ立国宣言とスポーツ基本法制定への動きは、オリンピック教育の実現を後押しするものであった。筑波大学はこうしたスポーツ立国戦略に多様な側面で協力した。ヒロシマ・オリンピック招致に関しては、附属高等学校のOBである秋葉忠利広島市長による2020ヒロシマ・オリンピック招致の講演を2011年1月19日に附属中学校で開催したが、残念ながら2011年4月に招致が断念された。

オリンピック招致やスポーツ立国宣言などによる関心の高まりが反映して、2012年ロンドン・オリンピックに向けてイギリスのラフバラ大学が取組んでいるような多面的なスポーツ科学と政策研究を推進する機関を筑波大学に設置することを構想した。それは当初、SRD (Sport Research and Development) という構想であった。その機関で、より包括的にオリンピック教育に取り組もうという考え方であった。いずれにせよ、いくつかの曲折を経て11の附属学校との関連を視野に入れたオリンピック教育の構想は、CORE (Centre for Olympic Research and Education) の設立に向けて、2010年7月頃から加速化した。8月5日には山田学長からIOCのロゲ会長にCORE設立に関する協力依頼の手紙を出してもらい、「オリンピック」という名称の使用と設立に関する理解と協力の確約を得た。また、附属学校教育局は校種の異なる11の附属学校を擁することから、8月13日から19日にかけてシンガポールで開催されたIOCの立ち上げた第1回YOGを視察した。最終的に教育推進室の協力で筑波大学オリンピック教育プラットフォームとしてのCOREの体制が確立されたのは2011年10月以後になってからのことであった。

6. おわりに

COREが筑波大学体育総合実験棟307に設置され、大学ネットワークのドメインを取得し、各附属学校との連携、大学以外の機関と密接な連携をとり始めることができたのは、山田信博学長の他に清水一彦副学長、そして新たに設置されたCOREの運営委員会委員長の真田久教授の力に大きく拠っている。また、オリンピック教育を国際教育拠点の業務として附属学校をまとめ、育て上げ運営を司った坪田耕三附属学校教育局教授、(附属学校におけるオリンピック教育推進専門委員会委員長)のオリンピック教育に対する重要な協力と貢献がいかに大きなものであるかは、筑波大学に開設されたCOREのホームページにはっきりと顕れている。2011年11月17日には、附属学校教育局がオリンピック教育国際シンポジウムをJOAと共催して開催するなど、筑波大学のオリンピック教育は逞しい成長を遂げている。東照雄附属学校教育局教育長の指導力の下で附属学校の底力を示し、筑波大学と11の附属学校が日本と世界のオリンピック教育に対する先導的な役割を果たし貢献してくれることを期待している。筑波大学は、最も多くの校種(普通制小、中、高、中・高等学校、総合学科の高校、視覚障害、聴覚障害、知的発達障害、肢体不自由、自閉症といった障害に対応する特別支援学校)を擁している、世界でも稀有な、教育に伝統を持つ大学である。この筑波大学から、世界平和に向けて多様で豊かな「オリンピック」教育が発信されることを心から願っている。

3 「オリンピック教育」とは何か

体育系教授 真田 久

1. オリンピック教育の定義

1-1.COREの考えるオリンピック教育

オリンピック教育とは、スポーツやオリンピック（パラリンピック等を含む）を題材にして、「国際理解を深め、国際平和の重要性を理解し、他者に貢献し得る力を養うための教育」と位置づけられる。

より具体的な実践内容として、

- ①オリンピックの理念（オリンピズム）と歴史の学習
 - ②オリンピックに関連した文化や社会問題等に関する学習
 - ③オリンピックの精神やスポーツの価値についての学習
- の三つに大別できる。

オリンピックの精神やスポーツの価値とは、スポーツを通して共通にみられるポジティブな価値観のことで、たとえばフェアプレイの精神、努力することの大切さ、他者に対する尊敬の念や友情、互いに理解し合うことの大切さなどである。こういった社会生活において重要な価値観を理解、実践することを通して、国際理解や異文化理解を深め、国際平和に寄与し得る人材を育成することが、オリンピック教育の目標である。

上記のことに関連して行われる学校内外、教室内外での教育内容（体育実技、運動会、球技大会、課外活動などのスポーツ実践も含む）がオリンピック教育である。

1-2. 複数教科の連携

学校教育においては、体育科や保健体育科において扱うことのみならず、複数教科との連携や総合的な学習の時間などで扱うことができる。例えば、古代オリンピックのスポーツ種目を行ったり、儀式を模擬的に行う場合に、次のことが考えられる。

- ・アスリートを題材にした絵画や詩歌を作成する。
- ・古代人の衣裳や古代人のスポーツ器具（槍、円盤、重りやスタート装置など）を制作する。
- ・古代人の優勝者に与えられたオリーブの葉冠を作成するとともに、オリーブの特徴について調べる。
- ・古代ギリシアにおいて、スポーツが盛んになった歴史的背景について調べる。
- ・ソクラテスやプラトンなど、古代ギリシア人の倫理観から、スポーツに対する考え方について調べる。

1-3. 総合的学習の時間の活用

長野で始められた「一校一国運動」のように、オリンピックに参加する国や地域の文化を学ぼうとする総合的な学習の時間での取り組みの場合、次のような内容が考えられる。

- ・相手国の文化（あいさつ、食べ物、人気のあるスポーツ）について調べる。
- ・相手国の生徒の生活（学校での授業内容、放課後や休日の過ごし方など）について調べる。
- ・相手国の著名なアスリートについて調べる。
- ・相手国のオリンピックの参加のあゆみについて調べる。
- ・相手国の人で身近に住んでいる人（都や区の国際交流委員、大使館関係者など）を招いて話しを聞く。
- ・相手国の生徒と交流する（メール、手紙や絵画の交換など）

2. オリンピック教育を行う根拠

わが国においてオリンピック教育を行う根拠としては、スポーツ基本法、そして学校教育においては、学習指導要領に求められる。（下線は筆者による）

2-1. スポーツ基本法（H23.6.24 公布、8.24 施行）

基本理念第二条

- 2 スポーツは、とりわけ心身成長過程にある青少年スポーツが、体力を向上させ公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培う等人格形成に大きな影響を及ぼすものであり国民生涯にわたる健全な心と身体を培い、豊かな人間性を育む基礎となるものであるとの認識の下に学校スポーツ団体家庭及び地域における活動相互連携を図りながら推進されなければならない
- 5 スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行ってできるよう、障害種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない
- 6 （スポーツ選手の競技水準向上）
- 7 スポーツは、スポーツに係る国際的な交流及び貢献を推進することにより、国際相互理解増進及び国際平和に寄与するものとなるよう推進されなければならない
- 8 （公正さとドーピング防止）

2-2 学習指導要領

2-1-1 小学校 社会 6 学年（平成 23 年 4 月より）

・歴史 ケ

日華事変、我が国にかかわる第二次世界大戦、日本国憲法の制定、オリンピックの開催などについて調べ、戦後我が国は民主的な国家として出発し、国民生活が向上し国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことが分かること（学習指導要領）

「オリンピックの開催について調べる」とは、例えば、スポーツの祭典としてアジア初めて東京で行われたオリンピック大会や、その後我が国で開催されたオリンピック大会を取り上げて調べ、戦後我が国の国民生活が向上したことや我が国が国際社会において重要な役割を果たしてきたことが分かるようにすることである。（同解説）

・世界の中の日本

「イ 我が国の国際交流や国際協力の様子及び平和な国際社会の実現に努力している国際連合の動き」(学習指導要領)

「国際交流」については、オリンピックや国際競技会などのスポーツによる国際交流や、歌舞伎や能、邦楽の演奏などの海外公演、海外での柔道や剣道などの我が国の伝統的武道の紹介、外国の絵画や舞踊、音楽などの日本での展覧会や講演など文化による国際交流を取り上げることが考えられる。(同解説)

2-2-2 学校 保健体育科 (平成 24 年 4 月より)

「体育理論」(各学年 3 単位時間以上)

1 運動やスポーツの多様性

2 運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全

3 文化としてのスポーツの意義 (3 学年)

(1) 文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする

ア スポーツは文化的な生活を営み、よりよく生きていくために重要であること。

イ オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること。

ウ スポーツは、民族や国、人種や性、障害の違いなどを超えて人々を結び付けていること。

(学習指導要領)

イ 国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割

オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、世界中の人々にスポーツのもつ教育的な意義や倫理的な価値を伝えたり、人々の相互理解を深めたりすることで、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることを理解できるようにする。また、メディアの発達によって、スポーツの魅力が世界中に広がり、オリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会の国際親善や世界平和などに果たす役割が一層大きくなっていることについても触れるようにする。(同解説)

2-2-3 高等学校 保健体育科 (平成 25 年 4 月より) (各学年 6 単位時間以上)

(体育理論 (内容) (1) スポーツの歴史・文化的特性と現代スポーツの特徴 (1 年次)

(2) 運動やスポーツの効果的な学習の仕方 (2 年次)

(3) 豊かなスポーツライフの設計 (3 年次)

(1) について

ア. スポーツの歴史的発展と変容

スポーツは人類の歴史とともに始まり、その概念が時代に応じて変容してきていること。

また、我が国から世界に普及し、発展しているスポーツがあること。

イ. スポーツの技術、戦術、ルールの変化

スポーツの技術や戦術、ルールは用具の改良やメディアの発達に伴い代わり続けていること。

ウ. オリンピック・ムーブメントとドーピング

現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なもの

にオリンピック・ムーブメントがあること。また、ドーピングは、フェアプレイの精神に反するなど、能力の限界に挑戦するスポーツの価値を失わせること。

エ. 現代のスポーツは、経済的な波及効果があり、スポーツ産業が経済の中で大きな影響を及ぼしていること。(学習指導要領)

ウ オリンピック・ムーブメントとドーピング

現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピック・ムーブメントがあること、オリンピック・ムーブメントは、オリンピック競技大会を通じて、人々の友好を深め世界の平和に貢献しようとするものであることを理解できるようにする。また、競技会での勝利によって賞金などの報酬が得られるようになるとドーピング（禁止薬物使用等）が起こるようになったこと、ドーピングは不当に勝利を得ようとするフェアプレイの精神に反する不正な行為であり、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせる行為であることを踏まえ、オリンピックムーブメントとドーピングに重点を置いて取り扱うようにする。(同解説)

2-2-4. 総合的な学習の時間（小学校、中学校、高等学校学習指導要領）

以下に、例示した課題の特質と学習活動について示す。

国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題とは、社会の変化に伴って切実に意識されるようになってきた現代社会の諸課題のことである。そのいずれもが、持続可能な社会の実現にかかわる課題であり、現代社会に生きるすべての人が、これらの課題を自分のこととして考え、よりよい解決に向けて行動することが望まれている。(解説)

以上のように学習指導要領においては、オリンピック・ムーブメントや国際理解についての学習が明記されている。これを教える具体的な内容を構築することは、今後の学校教育におけるオリンピック教育のあり方を示す上で重要である。

また下記に示すように、国際オリンピック委員会（IOC）は、オリンピック憲章において、オリンピック・ムーブメントは教育的な営みであることを明記している。

2-3 オリンピック憲章 根本原則（IOC 2011 年版より）

- 1 オリンピズムは人生哲学であり、肉体と意志と知性の資質を高めて融合させた、均衡のとれた総体としての人間を目指すものである。スポーツを文化や教育と融合させるオリンピズムが求めるものは、努力のうちに見出される喜び、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である。
- 2 オリンピズムの目標は、スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進することにある。
- 3 オリンピック・ムーブメントは、オリンピズムの諸価値に依って生きようとする全ての個人や団体による、IOCの最高権威のもとで行われる、計画され組織された普遍的かつ恒久的な活動である。それは五大陸にまたがるものである。またそれは世界中の競技者を一堂に集めて開催される偉大なスポーツの祭典、オリンピック競技大会で頂点に達する。そのシンボルは、互いに交わる五輪である。

- 4 スポーツを行なうことは人権の一つである。各個人はスポーツを行う機会を与えられなければならない。そのような機会は、友情、連帯そしてフェアプレーの精神に基づく相互理解が必須であるオリンピック精神に則り、そしていかなる種類の差別もなく、与えられるべきである。
- 5 オリンピック・ムーブメントの中で社会やスポーツ組織でスポーツが行われるためには、その組織が自治の権利と義務を持たなければならない、これはスポーツのルールを自由に作ったりコントロールでき、その組織をつくったり、統治するということも含まれ、外部のいかなる干渉を受けることなく選挙が自由に行われなければならない、自治の理念が確実に受け入れられなければならない。
- 6 人種、宗教、政治、性別、その他の理由に基づく国や個人に対する差別はいかなる形であれオリンピック・ムーブメントに属する事とは相容れない。
- 7 オリンピック・ムーブメントに属するためには、オリンピック憲章の遵守及びIOCの承認が必要である。

以上のことから、オリンピック教育は、今後の日本や世界が求める理想的な人間を育む有効な手段であるといえよう。

4 「オリンピック教育」の実践

—大学と附属学校の連携による体育理論の授業—

体育系助教 宮崎明世

1. はじめに

筑波大学では、2010年12月、IOCの承認を受け、オリンピック教育プラットフォーム（CORE: Center for Olympic Research and Education）を設立した。COREは、スポーツを通じた国際平和を実現するため、国内外のオリンピック教育を推進していくことを目的としている。CORE設立の背景には、大学がこれまでに附属11校との連携によりさまざまな形で行なってきた、オリンピック教育の実績がある。この活動の柱のひとつとして、大学と附属学校との連携によるオリンピック教育実践のモデルの作成、および教育の推進を掲げている。

オリンピック教育は、「平和な社会の構築に尽くす調和的全人の育成」というオリンピック憲章の理念実現に向けて展開される教育活動である。1961年にオリンピック教育のセンターとして設立された国際オリンピックアカデミー（IOA）は近代オリンピックの創始者であるクーベルタンの思想の普及に貢献しており、同時に学校や大学、一般社会におけるオリビズムの啓蒙を進めている。IOAは教育者のためのテキストを出版しており、これまでも各大会の開催組織委員会を中心に様々な形で、オリンピック教育が行われてきた。しかしながら、諸外国の例を見ても通常の授業の中でオリンピック教育を扱った事例は見当たらない。学校における通常の授業の中でオリンピック教育を行うことは、すべての国民が教育を受ける機会を保障されるという点で意義がある。

学習指導要領の改訂によって中学校では、体育分野において「体育理論」が位置づけられ、3年間で3単位時間学ぶこととなった。その中の「3文化の中のスポーツの意義」に「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な意義や役割」という内容が含まれ、オリンピックなどの国際的なスポーツの大会が果たす文化的な役割について学ぶことが義務付けられた。また、高等学校学習指導要領では、「1 スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」の中で、「ウ オリンピックムーブメントとドーピング」として、国際親善や世界平和に貢献する現代のスポーツの代表的な例としてオリンピックムーブメントを挙げ、フェアプレイの精神に反するドーピングのことについてもあわせて学ぶこととしている。このように学習指導要領においても、体育の中でオリンピックについて学び、オリンピックを通して学ぶことが義務付けられたことから、そのモデルとなる指導案づくりが求められる。

本実践では、高等学校の通常の授業の中に位置づけられている、体育理論の授業で実現可能な指導案を作成し、授業を行なった。この実践を通して、学校教育、特に体育理論の授業の中で活用できるオリンピック教育のモデルとなる指導案を作成すること、授業の成果および今後の展開のための課題について明らかにすることを試みた。実践の概要を報告する。

2. 授業実践の概要

1) 対象

筑波大学附属高等学校1年生1クラス（男子20名、女子20名）を対象として、「体育理論」の授業5単位時間（50分/時間）をオリンピック教育に当てた。「体育理論」の授業は、通年で週1時間（1単位約30時間）行なわれている。授業の実施時期は2011年2月であった。

2) 指導案の作成と授業内容

授業内容を検討するに当たり、授業前に質問紙調査を行った。生徒の興味関心の対象を明らかにするため、興味のある内容について選択肢の中から2つを選択させた。選択肢は「未来と結ぶオリンピックーオリンピック学習読本」(真田他2008)の内容から作成した。1時間目は導入として、オリンピズムを中心に「オリンピック競技会」について学ぶこととした。学習内容に関する調査の結果から、上位3項目を3時間で構成し、最後の1時間は大学の教員であるオリンピック(河合季信准教授)に講義を依頼した。講義の内容は「オリンピックの価値」- Olympic Values -とした。指導案の作成にあたり、学習すべき内容について大学の研究者と協議を行ない、それぞれの内容について指導案を作成した。

(1) 単元計画

授業前の生徒に対する質問紙調査の結果を表1に示した。この中で上位3つにあげられた「古代オリンピック」、「オリンピックとフェアプレー」、「日本とオリンピック」を取り上げ、単元を構成した。全5時間の単元計画を表2に示した。

表1 オリンピックについて学んでみたい項目（事前調査）

タイトル	内容	数	%	順位
古代オリンピック	古代オリンピックはなぜ始まったか、大会優勝者に与えられたもの、理想的な身体を求めて、古代から現代に受け継がれるレガシー	20	50	1
オリンピックとフェアプレー	オリンピックで求められるフェアプレー、友情と尊敬、アンチ・ドーピング	15	37.5	2
日本とオリンピック	東京オリンピック(1964)、札幌冬季大会(1972)、長野冬季大会(1998)、活躍した選手、オリンピックの遺産	14	35	3
環境とオリンピック	オリンピックと環境問題、オリンピックの環境対策、環境保全とJOC	13	32.5	4
オリンピックが目指すもの	オリンピックの理念、オリンピックと文化、オリンピックと教育	8	20	5
近代オリンピックの歩み	創始者クーベルタンの考え、嘉納治五郎とオリンピック、オリンピックの国際的な広がり、オリンピックの課題	8	20	5
障害者のスポーツとパラリンピック	障害者のスポーツ大会の始まり、障害者のスポーツを支える組織、パラリンピックの規模と競技、活躍した選手	2	5	7

(2) 各時間の指導内容

実際に行なった授業の詳細を表3に示した。

第1時では単元全体の導入として、オリンピック競技会について、現在の姿、歴史とその意義を学ばせることを目標とした。単元の開始にあたり、冬休みの宿題として「祖父母、親の世代の記憶に残るオリンピック」について家庭で調査させ授業の中で話し合わせた。オリンピックが4年に1回開かれる意味（オリンピックアド）、夏季大会と冬季大会があり、現在の形になるまでの経緯を学んだ。行われている競技についてこれまでの変遷や種目決定の意図を学習し、今後の展望や希望について意見交換を行った。オリンピック憲章を中心にオリンピズムについて理解させた上で、オリンピックを行う意義について改めて考えさせた。

表 2 単元計画の詳細

時間	授業日	項目	内容
1	2011/1/19	オリンピック競技会とは	オリンピック競技会とは、オリンピアド、競技種目
2	2011/1/26	日本とオリンピック	日本で行われたオリンピックと活躍した選手、オリンピック・レガシー
3	2011/2/2	古代オリンピック	古代オリンピックの始まり、古代オリンピックから受け継がれるもの
4	2011/2/9	オリンピックとフェアプレー	オリンピックで求められるフェアプレー、友情と尊敬
5	2011/2/23	オリンピックの価値(Olympic Values)	河合季信・筑波大学准教授のお話し "Excellence", "Respect", "Friendship"

第2時は日本で行われた大会について学び、日本とオリンピックの関わりについて考えることを目標とした。これまでに日本で行われた大会について、東京オリンピック（1964年）を中心に、活躍した選手、有形無形のオリンピック・レガシー（後世に残したもの）を身近なところから考えさせた。現在では当たり前のように使用されている施設や交通網、テレビなど有形のレガシー、スポーツの一般化や健康志向などの無形のレガシーについて学習させた。また、長野大会（1998年）での「一校一国運動」や、2016年東京大会への招致活動の学習を通して、オリンピックとの関わり方やこれからの招致のあり方を考えさせた。

第3時では、事前調査で最も関心の高かった「古代オリンピック」について学んだ。この授業では、古代から現在まで受け継がれるものと変わったものについて学習することで、現在のオリンピックのあり方について考えさせることを目標とした。授業では、古代オリンピックがなぜ始まったのか、オリンピックが「平和の祭典」と呼ばれることの意味について学習し、現在のあり方を考えさせた。また、古代オリンピックの理念や当時行われていた競技種目について詳しく知ること、現在に至るまで変わらないもの、変わってきたものとその理由を学習した。

第4時ではオリンピックで求められるフェアプレイについて学習した。学習を通して日常生活にもフェアプレイの精神を広げていくことについて考えさせることを目標とした。ユネスコ国際フェアプレイ賞の日本人の受賞や、フェアプレイに関するエピソードを紹介した。また、アンチドーピングの活動や精神を学習させたが、ドーピングやそれに対する取り組みについては別単元を設定した。フェアプレイの精神の広がりとして、オリンピアンへの社会貢献の事例をあげ、有森裕子氏のカンボジアでの社会貢献活動「Heart of Gold」の活動を、映像を含めて紹介した。これらの学習を通して、フェアプレイの精神を日常生活に生かすにはどのようにすべきかを考えさせた。

第5時はアルベールビル・オリンピック（1992）ショートトラック銅メダリストの河合季信・筑波大学准教授に講師を依頼し、オリンピックの3つの価値（Excellence, Respect, Friendship）について学習させた。6人のオリンピアンへの「オリンピックによってあなたの人生はどのように変わりましたか」というインタビューを通して、オリンピックが与える影響について考えさせた。

3) 授業における生徒の様子

作成した指導案に従って実際に授業を行った。生徒の興味関心を調査したうえで授業内容を決定したことから、5時間を通して生徒の学習意欲は高かった。冬休みの宿題として取り寄せた「記憶に残るオリンピック」の話題では、祖父母からかなり昔のオリンピックの記憶が取材できた生徒もお

り、親の世代の話題も共通で、盛り上がる教材となった。記憶に残るオリンピックで多く挙げられた東京オリンピックに関して、生徒自身はほとんど知らないことを改めて認識し、その他に日本で行われたオリンピックについての興味も掻き立てられたようであった。オリンピックが残した有形無形のレガシーについて理解を深めることができた。

表3 指導計画の詳細

オリンピック競技会とは	ねらい	オリンピック競技大会の現在の姿と歴史を学び、オリンピックの意義について考える。
	導入	オリンピック競技会について:最近のオリンピック、いつどこであった?オリンピックとは
日本とオリンピック	ねらい	日本で開催されたオリンピックについて学び、日本とオリンピックの関わりについて考える。
	導入	親・祖父母、それぞれの世代の記憶に残るオリンピックがある。過去に日本で行われた大会はどんなもので、私たちに何を残したのだろうか。
古代オリンピック	ねらい	古代オリンピックについて学習し、現在まで受けつがれていることからオリンピックのあり方について考える。
	導入	オリンピックが残したレガシーには有形無形さまざまなものがあつたが、近代オリンピックが模範とした古代オリンピックはどのようなもので、今に引き継がれているものはどんなことでしょうか
オリンピックフェアプレー	ねらい	オリンピックとフェアプレーの関わりについて理解し、スポーツの世界だけでなく日常生活にもフェアプレーの精神を活用できるようにする。
	導入	古代オリンピックが1200年間も続いた理由の一つに不正行為防止の取り組みがあつた。現在に引き継がれる考え方はどのようなものだろう
オリンピックの価値	ねらい	オリンピックメダリストから”Olympic Values”に関する話を聞き、オリンピックの3つの価値「卓越」「友情」「尊敬」について自ら考え、日常に活かす。
	導入	河合季信先生の紹介:アルベールビル(1992)オリンピック、ショートトラック5000m リレー銅メダリスト
オリンピック競技会とは	ねらい	・記憶に残るオリンピック:親・祖父母の世代の記憶に残るオリンピックについての調査(冬休みの宿題)について話し合う ・オリンピックで行われる競技種目について:どんな競技が行われているか ・オリンピックの組織:IOC(国際オリンピック委員会)について、組織の目的、NOC(JOC)の役割 ・オリンピズムとオリンピックムーブメント:オリンピック憲章について、オリンピックムーブメントにはどのようなものがあるか
	展開	・これまで日本で行われた大会について(東京、札幌、長野大会):活躍した選手、有形無形のオリンピックレガシー 「オリンピックが開催されたことで、日本にどんな影響があつたと思いますか。具体的にはどんなものが残されたか知っていますか。」 ・オリンピック招致活動:2016東京への招致活動について、オリンピック招致の今後「東京にオリンピックを招致すべきだと考えますか」
古代オリンピック	ねらい	・古代オリンピックの始まり:エケイリア(休戦協定)、「平和の祭典」と呼ばれる理由 ・古代オリンピックの競技:どんな競技が行われていたか、幅跳、やり投げ、バンクラチオン、戦車競走など ・優勝者に与えられたもの:オリーブの葉冠とその意味 ・古代オリンピックから現在に受け継がれるレガシー:平和思想、オリンピックそのものと選手への賞賛、不正防止に対する努力(1200年間続いた原因の一つ)
	展開	
オリンピックフェアプレー	ねらい	・フェアプレーとは何か、オリンピックで求められるフェアプレーとは:決められたルールを守って正々堂々とプレイすること ・ユネスコ国際フェアプレー賞、日本人の受賞者:メキシコ大会サッカー代表、山下泰裕 ・フェアプレーとして讃えられる事例:1936年陸上競技棒高跳びの「友情のメダル」 ・アンチドーピング:ドーピングとはどんな行為か、なぜいけないのか ・フェアプレー精神の広がり:オリンピアンへの社会貢献・国際貢献の事例 有森裕子氏のHeart of Goldの話 ・フェアプレーの精神を日常生活に生かすにはどうしたらよいだろう。どんなことができるか。
	展開	
オリンピックの価値	ねらい	・オリンピックの3つの価値(Olympic Values:Excellence, Respect, Friendship)について:バンクーバー冬季大会開会式でのIOC会長のあいさつから ・6人のオリンピアンへのインタビューからオリンピックの価値を考える:「オリンピックによってあなたの人生はどのように変わりましたか」 ・何を感じることができたか、IOCはなぜオリンピアンにロールモデルとして期待しているのか
	展開	

事前調査では「古代オリンピック」についての関心が最も高く、生徒の半数が学んでみたい内容としてあげていた。これは他教科との関わりも大きく影響していると考えられる。対象校のカリキュラムでは高校1年生で「世界史」が必修であり、生徒の歴史に関する興味関心が高かったと考えられる。自由な校風の中、知的好奇心を刺激されることが動機づけにつながるような、本校の特徴がうまく生かされたのではないだろうか。オリンピックに関する授業を行う上では他教科と総合的に関わりながら進めることの必要性を感じさせるものであった。古代オリンピックの授業では、古代に行われていた現在とは異なる競技（錘を持った幅跳び、戦車競走、パンクラチオンなど）や女性だけの競技会、古代の休戦協定（エケケイリア）などが印象に残ったようであった。

単元の締めくくりの授業は、オリンピックのメダリストである筑波大学・河合准教授の講義であった。オリンピックから直接講義を受けることができるのも、大学との連携ができる附属学校ならではの特徴であろう。この内容も高校生には少し難しい、背伸びしてわかるようなちょうど良い程度であったと思われる。生徒は興味をもって授業に臨み、授業後に質問も多くだされた。授業時間が50分と短く、講師自身についての話には及ばなかったため、生徒からはオリンピックでの経験や選手村の様子など、選手しか知り得ないような具体的な情報が知りたかったという意見が寄せられた。

3. まとめ

本実践では高校生を対象に、通常の授業カリキュラムの中に位置づけられた「体育理論」の授業で行うことのできる、オリンピック教育のモデル指導案を作成した。指導案づくりでは研究者と教育現場を結んで内容を検討し、事前調査によって生徒の興味関心を反映することができた。その指導案をもとに高等学校1年生を対象に5回の授業を行い、それぞれの授業について授業の成果を検討した。これらのことにより、オリンピック教育を専門としていない教師が実施可能な、オリンピック教育の授業モデルを提案することができた。

今後の課題としては、実技などの体験的学習の導入が挙げられる。本実践では扱いたい内容が多く、講義形式が多くなったが、「親・祖父母の世代の記憶に残るオリンピック」については、各自の調査をもとに発表やディスカッションをすることができ、生徒にも好評であった。「古代オリンピック」の回の、古代に行われた競技種目については、「やってみたい」という感想が多く寄せられた。今後は知識を得る場面と考える場面、実際にやってみる場面を授業の中に設定し、より深く理解できるように工夫すべきである。

授業後に後期のレポートとして、授業で疑問に思ったことから一つを選んで詳しく調べさせた。授業を通してもっと知りたいと思ったことを自分なりに調べることで、授業後に知識を深め、興味関心を広げることができ、生徒たちも楽しんでこの課題に取り組んでいた。提出されたレポートは各自の興味関心に基づいてよく書かれており、興味深いレポートが多かった。今後の展開として、興味関心の近い生徒でグループを作り、グループレポートを発展させて、校内に展示したり、文化祭や学校紹介の場で発表したりするなどが考えられる。他にも生徒の関心の高かった「一校一国運動」を「一組一国運動」のように学校全体で展開することも可能と考えられ、ロンドンオリンピックに向けて検討していきたい。

古代オリンピックの授業では世界史を1年次で学んでいることもあり、生徒は世界史と関連付けて授業を受けていた。オリンピック教育は、教科としての保健体育にとどまらず、他教科と連携した学習の可能性があり、教科を越えて学校生活の様々な機会をとらえて指導することは、学習成果を深めることになる。今後は他教科との連携も含めて指導内容を精選したり、今回取り上げなかった内容を

広げたりして、さらなる指導案の改善を図り、体育理論におけるオリンピック教育の実践を広げて行きたい。

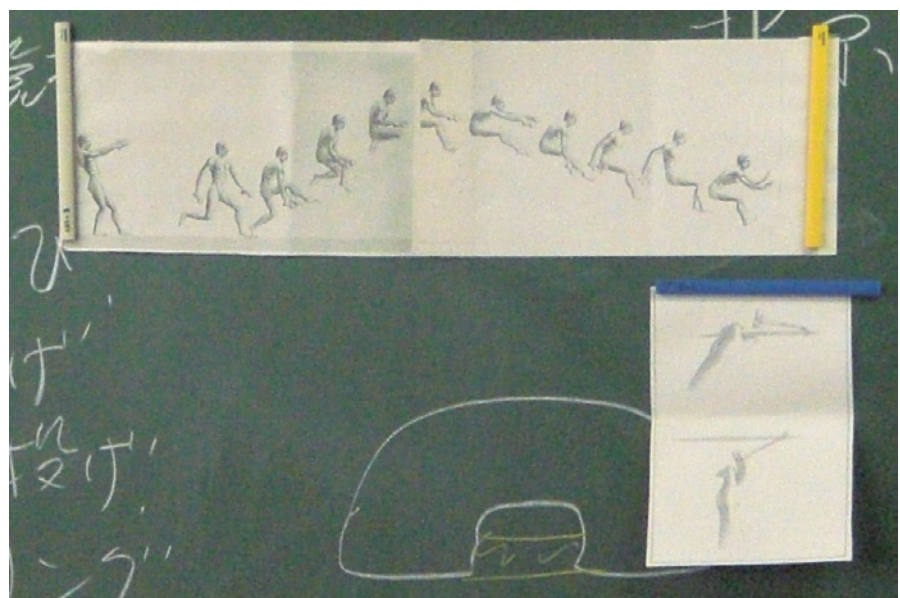
本報告書の内容は、筑波大学体育科学系紀要 34（2012年3月刊行）に掲載された実践研究の一部を再構成したものである。

<参考文献>

岡出美則，高橋健夫（2002）：オリンピック教育の概念と実践の展開．近代オリンピックの教育的意義に関する研究．平成11～13年度科学研究費補助金（基盤研究B2）研究成果報告書．研究代表者 真田久，pp4-57,2002.

真田久，岡出美則，田原淳子（2009）：未来と結ぶオリンピック～勇気・地球・共生～．オリンピック学習読本（高等学校）．東京オリンピック・パラリンピック招致委員会，図書印刷株式会社.

財団法人日本オリンピック委員会編（2007）：オリンピック憲章 Olympic Charter. ETHICS2007



5 「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」に参加して

附属高等学校 中塚 義実

2011年の夏、2名の生徒を引率して、中国北京市で開かれた標記フォーラムに参加し、「オリンピック教育」を目の当たりにした。本報告は、9月30日に筑波大学附属高校で開かれた「スポーツ文化研究会 サロン2002」月例会、および12月4日に国立スポーツ科学センターで開かれた「オリンピック教育国際シンポジウム2011（第34回JOAセッション）」での報告を再構成したものである。

I. オリンピック教育とのかかわり

1. CORE 設立準備から「渦中の人」まで

筆者は筑波大学附属高校の保健体育科教師として、スポーツの・スポーツを通しての教育、オリンピックの・オリンピックを通しての教育に長年携わってきた。しかしそれが「オリンピック教育」であるとの自覚は、これまでほとんど持っていなかった。

「筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）に、附属学校の取りまとめ役として関わってほしい」との打診が、当時の阿部生雄教育長からあったのは、2010年度に入ってすぐのことである。そしてCORE設立準備の動きが活発化した9月下旬、国士舘大学の田原淳子氏より、国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの派遣依頼が阿部教育長にあり、附属学校、特に附属高校で派遣可能かどうかを検討することになった。

こうして私は、一気に「オリンピック教育」の渦中の人となってしまった。

2. オリンピック教育のすがた—田原氏から学んだこと

田原氏との打ち合わせの中で、知らなかったことや改めて気づかされたことがあった。田原氏提供のスライドを一部引用しながら、以下に記す。

1) IOCはオリンピック教育に力を入れている！

◆「国際ピエール・ド・クーベルタン委員会」がある！

- ・「クーベルタンの思想の維持・普及・教育・研究」を目的として1987年設立。会長はProf.Dr. Norbert Mueller（ドイツ）
- ・1997年サマランチIOC会長（当時）は、すべてのNOCにクーベルタン・スクールの普及促進を提唱
- ・主な活動は、出版物の発行／シンポジウム等の開催／IOC関連会議での発表／国際クーベルタン・ユースフォーラムの開催（1997～）／学術論文に対するクーベルタン賞の授与（2008～）

◆「クーベルタン・スクール」が世界各地にある！

- ・世界に約50校（幼稚園、小・中・高校）が加盟（2006年時点）
- ・ピエール・ド・クーベルタンの教育思想に賛同し、それを学校の教育理念としている学校。ピエール・ド・クーベルタンの名前を持つ学校や国際オリンピック委員会（IOC）の設立と強い結びつきのある学校が含まれる。
- ・高校は、2年に1回、輪番で「ユースフォーラム」を開催している。

2) 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムという行事がある！

【目的】 若い人々がクーベルタンの思想を感じとって、それを実践に移し、将来、自分の国でオリンピック、クーベルタンのムーブメントを形づくる力を養う。

【対象】 クーベルタン・スクールズ・ネットワークに加盟する高校。

- ・正式加盟校：生徒7名、引率教師1名
- ・オブザーバー参加：生徒2名、引率教師1名

【開催場所・頻度・期間】 加盟校が当番校となり隔年開催。1週間。

【内容】 プログラムに参加し、以下の5種目で一定の基準に達すると、クーベルタンメダルが授与される。

- ①知識テスト（オリンピック関連）、②スポーツ競技（陸上競技、水泳）、③社会活動（校長による活動の証明書）、④芸術パフォーマンス、⑤グループ・ディスカッション（オリンピズム）

3) 北京大会ではぜひ筑波大学（附属高校）に参加してほしいとの強い要望がある！

これまでの開催地は以下のとおり。

- 第1回 1997年 ル・アーブル（フランス）
- 第2回 1999年 マッチ・ウェンロック（イギリス）
- 第3回 2001年 ローザンヌ（スイス）
- 第4回 2003年 アレンツァーノ（イタリア）
- 第5回 2005年 ラートシュタット（オーストリア）
- 第6回 2007年 ターボル（チェコ共和国）… 田原氏初参加。日本に紹介。
- 第7回 2009年 オリンピア、パリニ（ギリシア）… 日本初参加（都立国際高校）。
- 第8回 2011年 北京（中国） 予定 … アジア初開催。五輪との縁が深い筑波大に！

国際ピエール・ド・クーベルタン委員会のアジア担当理事である田原氏は、2007年大会を経験し、日本の学校にもぜひ参加してもらいたいと考えた。そして、当時は2016年オリンピック招致活動に取り組んでいた東京都に話を持ちかけ、2009年度の第7回大会で都立国際高校がオブザーバーとして参加することになった。

続く2011年度はアジア初の北京開催である。参加校を検討するにあたり、筑波大学がオリンピック教育を中期計画に盛り込んだことを知り、阿部前教育長に打診したというのが話の経緯であった。

II. 附属高校の参加まで

1. 合意形成

筑波大学の中期計画に盛り込まれた「オリンピック教育」については当初から、教員の反応は好意的とは言えなかった。

そもそも「オリンピック教育」が何を指すのかわからない。例えば次のような疑問があった。

- ・オリンピック選手を育てるためのプログラムなのか？
- ・エリートのための教育を指すのか？
- ・オリンピックの東京招致活動の一環ではないのか？
- ・オリンピックのことは保健体育科が担えばよい。学校全体で取り組むとはどういうことか？

こうした疑問が潜在的にある中で、ユースフォーラムへの参加の話はなかなか受け入れてもらえない。「往復交通費は大学から、滞在費はクーベルタン委員会が持つ。だから費用はかからない」とは言うものの、さらに具体的な疑問が浮かび上がる。

・ただでさえ忙しいのに、いったい誰が引率するのか？
 ・なぜ附属高校が担わなくてはならないのか？
 ・クーベルタン・スクールになったら主催しなくてはならないと聞く。そんなことができるのか？
 最終的には、「今回はあくまでもオブザーバーとしての参加であり、オリンピック教育がどのように為されているのかを見てくることがねらい。引率は中塚」として、会議での合意を取り付けた。

2. 生徒への告知・募集・選考

全校生徒へ等しく周知するため、生徒への告知は、1～3年生が揃う4月の始業式の時とした。

口頭で全校生徒に伝え、始業式後のHRで、補足資料1を配布した。

7名の生徒から応募があり、国際交流委員会と保健体育科で選考にあたった。応募資格に照らしつ、レポートと面接で選考した。選ばれた2名の生徒(2、3年生各1名)はいずれも女子であった。

<補足資料1. 全校生徒告知用資料(2011.4.11.)>

全校生徒各位

2011.4.11.

北京で、世界の高校生と、オリンピックについて語りませんか？

～第8回 国際ビエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム へのオブザーバー参加者(2名)募集について～

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム(CORE)
 筑波大学附属高校国際交流委員会/ 同 保健体育科

「オリンピック」と言 えば、「4年に一度開かれる、スポーツの国際的競技会」ということは誰もが知っているでしょう。メダル争いに一喜一憂するだけでなく、大きなお金や政治家が動く国際的メガイイベントであることも、また東京都が再び開催地 に名乗りを上げようとしており、それに対して賛否両論あること も、さまざまなメディアを通してご存知でしょう。

しかし残念ながら、オリンピックの本当 のねらいである「オリンピズム」という考え方について、あまり語られることはありません。それは、体と心と知性の調和的発達を目指した人間の育成と、国際理解・国際平和の推進が核となる人生哲学であり、近年は「卓越(Excellence)」「友情(Friendship)」「尊重(Respect)」という言葉でその価値が表現されています。4年に一度の競技会は、これらの理念を広め、実現させていくための一つの方法なのです。

こうした理念のもと に世界中から高校生(約100名あまり)が集まり、座学や身体活動を通して学び、交流を深め、次代の人材を育てていこうという目的で、2年に一度、「国際ビエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」が開かれています。

今年の8月に北京で開かれる第8回大会には本校が招待され、2名の生徒を派遣することになりました。ここに概要をお知らせします。

趣旨に賛同し、前向きにとらえ、意欲的に取り組もうとする人の応募をお待ちしています。

記

【期 日】2011年8月13日(土)～21日(日) ※8/13朝:集合・出発～8/21夜:帰国・解散予定

【会場・主催校】北京第4中学校 ※アジアで唯一のクーベルタンスクール

【参加者】筑波大学附属高校生2名(学年・性別問わず)、引率教諭1名

【経 費】無料

※現地での滞在費は「国際ビエール・ド・クーベルタン委員会」が負担。渡航費は筑波大学が負担

【応募資格】

- 1) この活動の趣旨に興味を持ち、意欲的に取り組める者
- 2) 英語での簡単なコミュニケーションが可能な者
- 3) 若干の運動プログラムに参加できる者(短距離走や走り幅跳びなどがあります)

【応募方法】

興味ある者は4月18日(月)までに、保健体育科・中塚義実まで申し出てください。

応募多数の場合は、国際交流委員会と保健体育科が中心になって選考に当たります。

【補足】

・同フォーラムの内容等は裏面の報告を参考にしてください。もっと詳しいことを知りたい人は、中塚まで尋ねてください。「オリンピズム」については、(財)日本オリンピック委員会(JOC)のホームページ <<http://www.joc.or.jp/index.html>>にわかりやすく書かれています。

・筑波大学とオリンピック教育の関わりについては、2010年12月に発足した「オリンピック教育プラットフォーム(CORE)」のホームページ <<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/>>をご覧ください。

3. 課題の確認と準備

フォーラムに参加するにあたって、事前に取り組みねばならない課題や準備がある。担当の中塚のもとへは2010年の秋ごろから何度かEメールが届き、次の課題が提示されていた。

◆課題の提示：クーベルタン賞とは何か

- 1) Community Service … 地域貢献活動を事前に行い、校長先生の承認を得る。
 - 2) Olympic Knowledge Test … オリンピック運動に関する、15分程度の小テスト。
 - 3) Sports Tests … Taichi, Cross-Country, 75m, Long Jump, Swimming
 - 4) Arts Performance Award … 7分以内のパフォーマンス。
 - 5) Olympic Values … 3つのテーマでのグループ・ディスカッション。
- 1) は事前に行うべきこと。4) も事前に準備しておかなくてはならない。このほか、ここには書かれていないが、5分間の学校紹介もあるのでその準備も必要である。

しかし準備に取り掛かることができたのは、参加者の選考が終わった5月の連休明け。「オリンピックの歴史と現状」「オリンピックと日本の関わり」「嘉納治五郎とクーベルタン」などの学習は3年次の総合的な学習や2年次の体育理論で進めていたが、実質的な準備は7月に入ってからであった。

◆7月時点での準備状況

7月9日に保護者を交えた説明会を行った。その時点での課題は次のとおりである（配布資料より）。

<しておかなければならないこと>

- 1) コミュニティ・サービス（ボランティア活動）
- 2) 学校紹介（5分以内）の準備
- 3) アート・パフォーマンス（7分間）の準備
- 4) レポートの作成（“Empowerment Through Sport”と題する英文レポート）

<しておいた方がよいこと>

- 1) オリンピック運動やオリンピズム、クーベルタンについての学習
- 2) 太極拳の練習
- 3) お土産の準備
- 4) いまの日本の現状を理解し、伝えるための準備
- 5) 日本の（本校の）歴史・文化を学び、伝えるための準備

夏休みに入り7月21日（木）、25日（月）、8月4日（木）に集まり、学校紹介のスライドとアート・パフォーマンスの準備をした。また、他国の参加者と交換できるちょっとしたお土産（折り紙など）や、日本を紹介するための小物をそろえるのも大切な準備である。このあたりにも気がついた。

◆海外からのメッセージ

一方、海外からはあたたかい手紙をいただいた。3月11日の東日本大震災のニュースは世界中に配信され、参加校の一つ、ドイツのエアフルト校からは、地震・津波・原発事故で大変だろうけど、北京で会えるのを楽しみにしていますという内容の手紙と千羽鶴が送られてきた。

世界中の仲間が応援してくれていることを感じ、不安が募る一方で、期待も高まってきた。

Ⅲ. ユースフォーラムの実際

1. 概要

期間は2011年8月13日(土)～21日(日)。会場となった北京第四中学校は1907年創設のエリート校。国際教育事業にも積極的な、アジアで唯一のクーベルタン・スクールである。

フォーラムへの参加国は、オーストラリア、オーストリア(2校)、中国、チェコ、エストニア、ドイツ(2校)、イギリス、ギリシャ、イタリア、メキシコ、ノルウェー、スロバキア、チュニジア(ここまではクーベルタンスクール。各校7名)／コンゴ、キプロス、日本、ケニア、モーリシャス、マレーシア(斜体下線はオブザーバースクール。各校2名)。

参加生徒117名、引率教員22名、スタッフ約20名、そして北京四中のボランティア生徒約70名が、さまざまな形で関わった。

Coubertin -Schools:

Australia Winners of the Australian Coubertin Award
Austria Pierre de Coubertin Bundes -Oberstufenrealgymnasium,Radstadt
Austria Don Bosco -Gymnasium, Unterwaltersdorf
China BHSF-Coubertin School, Beijing
Czech Republic Gymnázium Pierra de Coubertina, Tábor
Estonia Ülenurme Gümnaasium, Ülenurme
Germany Pierre de Coubertin-Gymnasium, Berlin
Germany Pierre de Coubertin -Gymnasium, Erfurt
Great Britain William Brookes School, Much Wenlock
Greece Lyceum Pyrgos/Pierre de Coubertin
Italy Liceo Statale "Giuliano della Rovere", Savona
Mexico Instituto Coubertin, Oaxaca
Norway Gausdal vidergaende skole - Pierre de Coubertin
Slovakia Gymnázium Pierra de Coubertina, Piestany
Tunisia Lycée Sportif Pierre de Coubertin d' El Menzah, Tunis

Observer Schools:

Congo Winners of the National Coubertin Award organised by the Comité Congolais Pierre de Coubertin
Cyprus Pierre de Coubertin -Pancyprian Gymnasium, Nicosia
Japan Senior High School, Tokyo
Kenya Kipkeino School, Eldoret
Mauritius Winners of the National Coubertin Award organised by the Mauritius Pierre de Coubertin Committee
Malaysia Senior Methodist Girls School Kuala Lumpur

< 補足資料2. 全参加校 >

注) 筑波大学附属高校は「Senior High School,Tokyo」と記されている。これは、本校の正式名称「Senior High School at Otsuka,University of Tsukuba」を略された形だが、これではどこの学校か

わからない。英語名を見直すべきだろう。

オーストラリアは単一の学校ではない。「オーストラリアでは高校生を対象としたクーベルタン賞の選考と授与をすべての州で行っていて、各州のクーベルタン賞を受賞した生徒の中から一人ずつを選んで、国際クーベルタン・ユースフォーラムに派遣しています。学校で特にオリンピック教育を実施しているわけではありませんが、クーベルタン賞を受賞した生徒なので、オリンピズムを理解し、国際ユースフォーラムに参加するにふさわしい資質を持っているとみなされています」(田原氏談)

他はおおむね単一の学校である。その一つ、英国のウィリアム・ブルックス・スクールは、クーベルタンが近代オリンピックのヒントを得た競技会が毎年行われる、英国西部のマッチ・ウェンロックの学校である。彼らは、自分たちの校名に付けられたウィリアム・ペニー・ブルックスの功績を誇らしげに語り、「近代オリンピックを復興したのは自分たちの先輩である」とする小冊子を配布していた。

筑波大学附属高校はオブザーバースクールなので、2名の生徒、山西優香(3年1組、ダンス部)と星野慧(2年6組、テニス部)、および引率教諭として中塚義実(保健体育科、サッカー部顧問)が参加した。

2. クーベルタン賞をめぐる活動

クーベルタン賞を目指すプログラムが、このフォーラムの中心である。全プログラムを通してある一定の成果を収めた者にクーベルタン賞が授与される。最終日のクロージング・セレモニーで表彰されるが、受賞したのは7割程度。残り3割はメダルをもらえない。

- 1) コミュニティ・サービス … 事前にそれぞれの国や地域でボランティア活動に取り組む(各校の校長先生の証明を持参)
- 2) オリンピック知識テスト … 古代～近代オリンピックの歴史や出来事、オリンピズムについての筆記試験。30分程度で終わる分量だが、英語での解答が求められることと、ギリシャの歴史などヨーロッパ人向けの出題が多いので、ヨーロッパ圏以外には難しいと感じた。もっとも、「過去問」をしっかりとっておけば、だいたいできるようだ。
- 3) スポーツテスト
 - ①太極拳 … 事前に、配信された映像で練習してくる。期間中もモーニング・エクササイズで復讐。最後は、北京四中の太極拳の先生の前で実演。全員合格した模様。本校の山西さんは「中国人よりよくできる」と高く評価された。
 - ②クロスカントリー … 男子2,300m、女子1,700mの校内回周コース。本校の星野さんが女子レースでトップだった。
 - ③以下から3つを選択 … 標準記録をクリアしなければならない。
 - a. 水泳(50m自由型)
 - b. 短距離走(男子100m、女子75m)
 - c. 走幅跳
 - d. 砲丸投
- 4) アート・パフォーマンス … 7分間のパフォーマンス(各国のスポーツ文化を表現)。
- 5) オリンピック・ヴァリューズ
 - ①“Empowerment of Sport”と題するレポート … 事前に作成したものを提出。
 - ②グループ・ディスカッション … 10人程度のグループに分かれてディスカッション。テーマは次のとおり。
 - 討議 a. Citius, Altius, Fortius(より速く、より高く、より強く)
 - 討議 b. Respect, Excellence and Friendship(尊重、卓越、友情)

3. スケジュールとトピック

フォーラムは、クーベルタン賞をめぐる活動が柱となるが、交流や観光プログラムもあり、何より多国籍の参加者が同室で過ごす寮生活が、互いにとってのよき思い出となったようだ。

以下、スケジュールを追いながら振り返ってみたい。

◆8/13 (土) 7:30 羽田空港国際線ターミナル集合

9:30 出発 → 3時間のフライト(時差1時間を引いて) → 11:30 北京国際空港着。

13:30 頃 ミドルスクールの寮に到着。さっそく北京四中生からインタビューを受ける。

~16:30 頃 近くの胡同を北京四中生の案内で散策。

18:30 頃 寮を出てシニアスクール(メイン会場)へ。10分ほど歩くので不便(8/16に移動することになった)。

19:30 頃 夕食(シニアスクールの食堂でバイキング。来た人から食べてよい。以下同様)。

21:00 全体会(諸注意等)。

21:30 教師ミーティング。

※門限22:30、消灯23:00。男女フロア間の行き来は禁止など、学校の寮ならではのルールあり。

◆8/14 (日) 7:15 太極拳(全員で、練習してきた型を実施。クーベルタン賞の準備でもある)

8:00 朝食。

9:00 北京四中ガイドツアー(グループに分かれて、北京四中生の案内で学校見学)。

10:00 講義①オリニズムとピエール・ド・クーベルタンについて

講義②中国とオリンピックの関わり

12:30 昼食。

14:00 頃 バナー作成。

16:30 オープニングセレモニー。

19:00 夕食。

19:30 頃から 歓迎文化祭(北京四中主催)。

ブースを回りながら中国文化を体験したりゲームを楽しむ。雨だったので屋内になった。



朝のエクササイズは太極拳



ピエール・ド・クーベルタンの子孫の方の講義

◆ 8/15 (月) 7:00 起床、7:30 教師ミーティング (生徒は7:15 太極拳)。

8:00 朝食。

9:00 ~ 14:15 頃 観光① 紫禁城 (故宮)。

15:00 グループ討議① Citius, Altius, Fortius 終了後は全体会で代表者が報告。

17:00 ~ 学校紹介 (各校5分)。

19:00 夕食。

20:00 ~ 21:30 頃 学校紹介 (各校5分)。

※ミドルスクールからシニアスクール (メイン会場) の寮へ、翌朝移動することになった (別の団体が使用していたらしい。会場はシニアスクールなので便利になった)。



学校紹介の様子



歓迎文化祭の様子
(北京四中生が欧米人に書道を教えている)

◆ 8/16 (火) 7:00 起床、7:30 朝食。

8:00 教師と審判の打ち合わせ (生徒はウォーミングアップ)。

9:00 スポーツテスト: この日は陸上、水泳、太極拳を実施。

山西さんは「中国人より太極拳がうまい」と好評価を受ける。



プールでは 50m 自由形

12:00 頃 部屋移動 & 昼食。

15:00 知識テスト。

16:30 教師の緊急ミーティング。



グラウンドでは走幅跳び他が行われている

「生徒たちの素行」について北京四中側から嚴重注意があり、生徒への指導を徹底しようという内容。寮での男女のフロア移動、ペットボトルの放置、また教師自身による寮内喫煙…。文化の違いを踏まえた上で、当地の文化をリスペクトするよう、指導の徹底を確認した。

17：30 グループ討議② Respect, Excellence and Friendship

全員が集まっているところで、担当のオーストラリアの先生から、厳しい口調で緊急ミーティングの内容が話された。生徒たちは神妙に聞いていたが、態度が良くないため、立たされる生徒もいた。

20：00 国際ダンスパーティ。

北京四中主催のパーティ。各国のダンスも紹介され、最後は入り乱れて踊っていた。



国際ダンスパーティの様子



空き時間にはスポーツ交流（常設の卓球台あり）

◆ 8/17（水）7：00 起床、7：30 朝食。

8：30 ウォーミングアップ。

9：00 クロスカントリー。

男子2レース、女子2レースが行われる。本校の星野さんは女子で1位だった！



クロスカントリーのスタート前



グループ・ディスカッションの様子

14：00～18：00 頃 観光②オリンピックベニュー。

「鳥の巣」と「ウォーターキューブ」へ全員で出かける。「鳥の巣」は2009年に行っているのに驚きはなかったが、初めて行った「ウォーターキューブ」には驚いた。辰巳国際水泳場と区民プールと豊島園がくっついているような感じ。レストランやショップも充実している。オリンピック後の施設利用としては大変優れたモデルだと感じた。



「鳥の巣」(北京五輪メインスタジアム)の前で



「ウォーターキューブ」(水泳会場)へ

19:30 夕食。

20:00～21:15頃 グループ討議③ Contributing To Intercultural Understanding
その後生徒はホールなどでくつろく。

◆8/18(木) 7:00 起床、7:30 教師ミーティング。

8:15 朝食。

11:00 アート・パフォーマンス(各校7分)。

13:00 昼食。

14:00 アート・パフォーマンス(各校7分)。

18:50 夕食。



アートパフォーマンスの様子



ミニエキスポの様子(日本のブース)

19:30 過ぎ ミニエキスポ(文化交流)。

それぞれが長机1台分程度のブースを設け、各国の文化を展示して交流を楽しむ。

日本ブースのイメージは“祭”。はっぴを着て団扇や扇子を並べ、折り紙や竹とんぼで楽しんでもらった。

◆8/19(金) 7:00 起床、8:00 朝食。

9:00～15:30頃 観光③万里の長城。

「八達嶺」ではなく「居庸関長城」へ全員で出かけた。急な坂で、終点がある。

15：40 頃～ 自由時間。

中塚は北京市内を一人で探検。北京四中のすぐそばにある北海公園を通り抜け、故宮の外側を歩き、中山公園を通って天安門広場まで、約1時間半歩いた。帰りはタクシー。

19：00 夕食。

20：00 映画観賞（フェアプレーに関する啓蒙映画）。



万里の長城にて



万里の長城

◆ 8/20 (土) 7：00 起床、8：00 朝食。

8：30 頃～ 高校生2名および田原氏と中塚の「日本チーム」でサマーパレス（頤和園）へ出かけた。地下鉄移動（全線2元）は貴重な経験。

12：30 頃 北京四中へ戻って昼食。

14：15 教師ミーティング。

16：30 クロージング・セレモニー。

歓迎の歌や踊り、挨拶、優れたアートパフォーマンスの再演、そしてクーベルタン賞の表彰。チームごとに登壇するが、メダルをもらえない者も3割程度いた（本校の2名はいずれも受賞した）。

開催校のバトンが、北京四中から次期開催のノルウェーに渡された。

最後は全員で蛍の光の合唱。その伴奏を星野さんがした。

19：30 フェアウェルディナー。

ミニエキスポをやった前庭で、バイキング方式で食事しながらのパーティ。

21時ごろに、最初のバスが出発、空港へ向かう。徐々にお別れモードに…。



クロージングセレモニー



クーベルタン賞を受賞する日本人チーム

◆ 8/21 (日) 7:00 起床、8:00 朝食。

8:00 「日本チーム」は、観光&買い物ツアー。地下鉄で前門～天安門広場へ。

11:30 北京四中出発。

15:45 北京国際空港発 → 3時間半のフライト (時差1時間) → 20:15 羽田空港着。

両家族総出でお迎え。8泊9日の引率業務は無事終了。

4. 日本をいかに伝えたか

今回、フォーラムに参加するにあたって、5分間の学校紹介と、7分間のアート・パフォーマンスの準備が大変であった。限られた時間、人員で、日本の、それも今の日本をどう伝え、どのようなメッセージを発信していくかということに、生徒ともども頭を悩ませた。

◆学校紹介

「嘉納治五郎」のクリアファイルに、英文の学校紹介 (附属学校教育局で用意してもらったもの) とパワーポイントのスライドのコピーをはさみ、事前に全員に配布しておいた。セーラー服姿の山西さんと星野さんの英語によるプレゼン内容は、概ね次のとおり。

日本は美しい国。富士山や桜があって四季がある。

3月11日、M9の大地震が発生し、津波や原発事故で大きな被害を被った。ライフスタイルの見直しも迫られている。海外の方からの多くの支援には心より感謝します！

さて、私たちの学校は、1888年創立で、東京にある。教員養成を担う東京高等師範学校を前身とする筑波大学の附属学校である。いま私たちは制服を着ているが、実は1970年代、生徒会の活動により、本校では服装は自由になった。本校の校風は「自主、自律、自由」である。

学校は4月に始まり、月～金の8～15時まで授業がある。そして放課後は学校でいろんなスポーツをしている。本校は、学校スポーツ発祥の地である (と言い切った)！

こう言い切れるのは、明治時代の校長である嘉納治五郎の存在が大きい。嘉納治五郎は教育者として本校の校長を長く務めたが、柔道の創始者として有名である。また、スポーツによる国際交流のパイオニアであり、中国から7,000人もの留学生を受け入れた。アジアで最初のIOC委員で、日本体育協会の創始者でもある。このような校長先生のもとで、日本の学校スポーツが展開していった。

日本では、高校スポーツのトーナメントが盛んで、特に野球やサッカーの全国大会はメディアが大きく取り上げる。我々もそのような大会に参加するが、この他に学習院高等科-天皇家の教育のため

にできた学校（と言い切った）－と毎年一度の定期戦がある。山西はチアリーダーとして、星野はテニス部員として参加した。

私たちはスポーツのチカラを信じています。このフォーラムで友達になりましょう！

◆アートパフォーマンス

まずは、日本で最もポピュラーな体操と言える「ラジオ体操」を紹介し、実際に第一体操を、参加者全員にやってもらった（面白がってやってくれていた）。

次に、「外国の人が持つ日本の印象って何だろう」「フジヤマ、忍者、サムライかなあ…」「だけど私たちはそうじゃないよね」ということで、今の日本の若者文化を代表する「AKB48」を紹介し、音楽に合わせて踊った…（ちょうど7分間）

ここでは二人は「なんちゃって制服」を着用している。

Ⅳ. ユースフォーラムに参加して

前述のとおり、本ユースフォーラムの参加報告は、9月30日の「スポーツ文化研究会 サロン2002」月例会（サロン2002 ホームページ <<http://www.salon2002n.net>> の「月例会報告」に掲載）、および12月4日の「オリンピック教育国際シンポジウム2011（兼JOA レクチャー）」（筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）のホームページ <<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/index.html>> に掲載）ほかで何度か行った。いずれも公開型のセミナーであったが、残念ながら附属学校関係者の参加はごくわずかであり、オブザーバーとして参加した成果と課題が届かないことにもどかしさを感じている。

今後とも機会を設けて、多くの方にお伝えしたい。

ここでは国際シンポジウム2011で用いたスライドをもって、まとめとしたい。

1. ユースフォーラムに参加して（成果）

1) 「オリンピック教育」で求められているものが、ある程度理解できた

①クーベルタン賞を通して

各項目がクーベルタンの思想を反映 → 「オリンピック教育」の内容

②プログラム全体を通して

・異文化理解と国際交流 → 国際平和への貢献につながる

・様々な活動の中で印象付けられる「オリムピズム」

例) クロスカントリーでの支え合い・助け合いを賞賛

例) マナーに関する指導の中で「異文化をリスペクトせよ」との言葉

例) クーベルタン賞は全員に授与されるわけではない！

2) 各国の状況が、ある程度わかった

・現状は、ヨーロッパ主導で「オリンピック教育」が展開されている

・日本でできること、やっていることが多々ある → 日本からの情報発信

※「オリンピック教育」と、改めて称する必要があるのか？

2. 今後の課題

1) 青少年の国際交流プログラムにどう取り組むか？

・外国へ行ったとき、日本の何を、どのように伝えるか？

・外国から来てくれたとき、日本の何を、どのように伝えるか？

- ・諸外国について、何を、どのように学ぶか？
- ・コミュニケーション能力について、何を、どのように学ぶか？

2) 「オリンピック教育」をどうとらえるか？

- ・ここでいう「オリンピック」は“競技会”のことか、“理念”のことか？
→ “理念”を指す。しかし“競技会”をめぐる諸課題も取り上げたい。
- ・ここでいう「教育」は、青少年向けの営みなのか？
→ せっかく“スポーツ”という文化が、教育から、青少年限定から解放されようとしていたのに…
- ・「オリंपイズム」は、果たして人類普遍の真理なのか？
- ・「クーベルタン」に集約してよいのか？

3) 日本での／日本からの「オリンピック教育」をどうとらえるか？

3. まとめ—自分たちには何ができるか

◆現状でも「オリンピック教育」は、様々な場面で為されている！

- あえて「オリンピック教育」を唱える意味・意義を考えたい

◆為されてはいるが、「歴史」や「理念」についての教育は不十分！

- 近代スポーツ導入期における先駆者の思想と功績、特に、嘉納治五郎の遺産についての学習が必要！

学校スポーツのルーツは、明治期の東京高等師範学校にある。その附属学校としての歴史教育が重要。とりわけ嘉納治五郎の思想と功績については欠かせない！

↓

もっとできることがある。実践し、発信していきたい

↓

「ヨーロッパ中心のオリンピック教育」から、
ローカルを加味したグローバル（GLOKAL）な「オリンピック教育」へ

以上、ユースフォーラムに参加して感じたことを、項目のみ列挙した。機会があれば詳細について論じたい。

派遣にあたってご理解とご支援をくださった方々に、心より御礼を申し上げます。

ありがとうございました。

6 パラリンピックに感じること

附属視覚特別支援学校 寺西 真人

パラリンピックの紹介

現在のパラリンピック（Paralympic）とは、オリンピックの終了後に、同じ開催都市で行われている、身体障害者（聴覚障害者を除く）、もう一つのオリンピックで、夏季と冬季大会に開催されている。近年は、知的障害者も参加している。Parallel+Olympics と解釈されている。

原点は国際聾者スポーツ大会（デフリンピック）から始まった。

第二次世界大戦後、ストーク・マンデビル病院のスポーツ治療（リハビリ）的要素が多かったが、参加国・参加選手が増えて現在に至っている。

パラリンピック大会の規模の推移

夏季パラリンピックとしては、1960年、イタリア・ローマ大会から始まり、1964年の東京オリンピックでは、参加国21、参加選手375人、競技数は9種目であった。

年度	場所	参加国	参加選手	競技数	日本選手
1964年	日本・東京	21	375	9	53
1980年	オランダ・アーネム	42	1973	13	37
1984年	アメリカ・ニューヨーク	45	1800	18	17
	イギリス・アイレスベリー	41	1100	18	35
1988年	韓国・ソウル	61	3057	17	141
1992年	スペイン・バルセロナ	83	3001	16	75
1996年	アメリカ・アトランタ	104	3259	17	81
2000年	オーストラリア・シドニー	122	3881	18	151
2004年	ギリシャ・アテネ	135	3808	18	163
2008年	中国・北京	146	3951	19	294
2012年	イギリス・ロンドン				
1998年	日本・長野	32	571	5	70

現在では、世界最高峰の障害者のスポーツ大会として発展し続けている。

パラリンピックに出場するための道のり

- ① 大会で定められた標準記録を公認大会で突破する
- ② 世界ランキングの上位に入り出場枠を獲得
- ③ 世界選手権や公認地域大会で出場権を獲得

などの厳しい条件をクリアーし、尚且つ国内各競技団体に選考された世界のトップアスリートだけが出場する大会になったのが現状である。

このように開催ごとに競技レベルが上がり、事前に海外遠征をして出場権を得ることは、金銭的にも学業的にも負担が増え、特別支援学校の在學生では参加しにくくなった。また社会人選手たちも職場の理解や支援が無いと参加しにくい状況に変化してきている。

パラリンピック（水泳競技）と自分の歩み

自分は、視覚特別支援学校に着任して、バルセロナ大会から顧問であった水泳部員の生徒たちをパラリンピックに参加させる様になった。

社会的な知名度を含めて感じたことを述べる。

92年バルセロナ大会の時は（在校生2名が水泳で参加）、職場内でもパラリンピックに対しての理解は少なく、9月の大会時に仕事を休み観戦・応援に行きたいと申し出たが、許可は下りず、結果はクラブ指導中にFAXで知らされたのを覚えている。テレビのワイドショーと選手の地元の新聞しか取り上げられなかった。今から思えば、海外の選手層も厚くなく決勝のレベルは高くなかった。

96年アトランタ大会は、夏季休暇中であり観戦・応援に行くことが出来た。

この時に金メダルを獲得した河合純一（水泳、視覚障害、全盲の部）のおかげで、周囲では話題性が少し高まった。マスコミ関係の取材も多くなった。大会でも次はライバルになると感じられた選手たちが増えてきた。タッピング棒（指示棒）を利用する事も知られ始めたと感じている。

98年長野大会で 国内のパラリンピックという言葉の認識度が上がった。

メダルラッシュに沸き、国内の報道も多く、バリアフリーという言葉も聞かれる様になった。また、公共施設や交通機関でもエレベーターやスロープの設置場所が多くなり、車椅子使用の人の姿が街中で多く見られる様になったと感じている。

2000年シドニー大会では（在校生ではない3人の視覚障害の選手）が参加した。日頃からいつも一緒に練習をしていたので、日本選手団の役員に入れて欲しいと要望したが、願いは叶わなかった。

パラリンピックという言葉は社会的に認められたが、視覚障害の選手のサポートの理解はまだまだと感じた。視覚障害者のメドレーリレーで世界新記録を残し、金メダルを獲得した。職場では、応援に行きたいので認めて欲しいと何度も管理職にお願いをしてやっと許可をもらい応援に行けた。

2004年アテネ大会は、在學生2名と卒業生1名と自分が日本選手団として参加した。シドニーの時と比べると予想以上にレベルが上がっていて、苦戦をした。結果的にメダルは取れたものの狙った色のメダルは獲得出来なかったが、結果を残せたことには満足できた大会であった。



写真左 2004年アテネ、水泳、100M背泳ぎ。

左から、秋山 S11 女子（銀）、寺西、河合 S11 男子（銅）、酒井 S12 男子（銅）

写真右 2004年アテネ、筑波関係、左から、広瀬（柔道）、河合（水泳）、加藤（柔道）、斉藤（陸上）、酒井（水泳）、浅井（ゴールボール）、寺西

また、アテネ大会では、柔道・ゴールボール・陸上と学校関係者の参加があり職場でも盛り上がりがあった大会だった。

2008年北京大会は在校生1名と卒業生2名とで水泳競技に参加した。

事前のランキングで苦戦が予想され、メダルにも手が届かないと予想されていたので辛かった大会である。

高校3年生で参加した木村敬一選手は、本校で中学1年から水泳部に在籍した生徒で、当初から決勝に残るのを目標にしていた。しかし、マスコミをはじめ周囲がメダルという言葉を口にするので指導上悩んだ事もあった。

会場写真 中央 河合 右 木村



閉会式前



一部マスコミで師弟対決と注目もされた。年代は異なるものの、自分の育てた選手がパラリンピックの決勝に2名がスタート台に上がった事は嬉しい限りであるが、自己満足と言われても仕方の無い結果でもあった。

2012 ロンドン大会は最近では出場枠を獲得するのが一番厳しいと感じている。理由は海外の選手のレベルがあがり、指定大会で上位に入賞できず、ランキングが上げられない為である。選手たちと今出来る事をしっかりと積み重ね、チャンスがあったら十分に発揮したいと思う。

今後の課題

オリンピックと同じユニフォームにもなり、注目度が増してきた。国内でもリハビリから競技スポーツへ変貌し、厳しいトレーニングを積まない限り出場が出来なくなった。そんな現状での問題点・課題は山ほどある。

まず一番は、専門的指導者の不足を感じる。健常者の競技指導から障害者のスポーツ指導も可能であるし、また障害に合わせた独自のスポーツもあるが、各々の障害による特性を知り、サポート・指導していく人材が少ない。

次に練習場所が少なく練習環境が整っていないことである。最近国内では民間のフィットネスクラブやスポーツジムが数多くあるが、障害がある為に会員になれないケースは少なくない。障害者優先の施設もあるが、交通の便が良い所に立地しているケースは少なく、単独で練習しにくい状況が多い。

海外遠征や合宿などの費用面の出費が多く、金銭面と時間にゆとりが無いとパラリンピックは目指せない現状で支援を必要としている。

選手側の精神的・社会的自立の側面でも課題が残る。決して多い人数の訳ではないが残念ながら挨拶も出来ない、感謝も表現しない、時間や約束を守れない選手がいるのも事実である。日の丸を背負う社会的責任を持てる選手を育てていかないとならない。

最後にパラリンピックの選手は「すごいな」「障害があってもこんなに出来るんだ」という大きな可能性や夢を子供たち中心に持たせられる人間であって欲しいと自分は願っている。勿論スポーツの世界だから、勝つことも大切であるが、勝つための努力や人間模様も見られているという意識を持って競技に臨んで欲しい。そんな選手を育てたいと思う。

(参考文献 公益財団法人 日本障害者スポーツ協会ホームページ)

7 各附属学校における「オリンピック教育」

(1) 附属小学校における「オリンピック教育」

1 寺西真人氏のご講演（平成 24 年 1 月 16 日）

パラリンピックにおいて日本代表選手を指導引率された寺西真人先生のご講演を、全校生徒で聞く機会にめぐまれました。

パラリンピックにおける競技での水泳選手が、ゴールするときに壁にぶつからないように補助する様子や、活躍する日本人の様子を話していただいた。子どもたちは、実演や写真をまじえて話をさせていただく寺西氏の話に聞き入り、不自由さを乗り越えて活躍する選手たちの様子を知ることができた。

実際にアイマスクをした本校の教員が、杖なしでは一段の階段すら降りることができない様子を子どもたちはじっと見ていた。また、目を閉じ、一切の話をしない時間を共有する体験もした。杖一本が唯一の外界とのつながりになっている人の気持ちをわずかではあるが感じる時間になったのではないだろうか。

そうした状況で生活する困難さに負けず、さらに世界の場で活躍する選手の方々の様子を知ることは、子どもにとって大きなプラス効果が考えられる。目標をもった人たちの強さ、スポーツを通して人生を豊かにすることの大切さ、競い合う中での友情を子どもたちが感じてくれたことと思っている。

2 日常活動におけるオリンピック教育

附属小学校では日常の学習活動の中に、オリンピック教育の精神は根付いている。一番の端的な例が、運動会である。全体が紅白対抗で競い合う。徹底して勝つという目標に向かってクラスで力を合わせる。そこでは、自分に勝つこと、友達との協力や助け合いをすること、一致団結することが必要になってくる。特に、6年生の組み体操は、ペアを組み、お互いが上にも土台にもなる。練習に練習を重ねて、ペアの息が合うようにならないと、クラス全体の成功はない。力を出し尽くすからこそ得られる感動を1年生から6年生まで味わうことができるのが、本校の運動会である。（文責：附属小学校 鷺見 辰美）



(2) 附属中学校における「オリンピック教育」

2011年度では、1・2年生での保健体育授業、3年生の総合的な学習の時間において「オリンピック教育」といえる活動が実践された。以下、簡単に報告したい。

I. 1年生の体育授業における実践

保健体育科の授業の中で、1年生の時期に長距離走を取り入れている。その単元のまとめとして、1学年合同体育授業（2時間続き）を設定し駅伝大会を開催した。表彰セレモニーでは、月桂冠を優勝チームに贈り、榮譽を称えた。その際に、オリンピックやマラソン大会の表彰式において、月桂冠を勝者に贈ることやその意義、また本校には月桂樹が生えていることを紹介した。



表彰式での月桂冠授与

II. 2年生の保健授業における実践

本校の保健体育科では、2年生において週1時間を通年にわたり保健の授業を行っている。今年は、3時間を「オリンピック単元」として授業を展開した。冬休みの課題であった調査を導入として、主な内容を「オリンピック競技大会とは」「日本とオリンピック」「古代オリンピック」「オリンピックとフェアプレー」として授業を行った。

本校の校長を務められていた嘉納治五郎先生の生誕150周年を記念した広報誌が2010年に発行された。それを2学年生徒全員に配布し、活用して授業を行った。

III. 3年生の総合的な学習の時間（保健体育コース）

3年生の選択学習として、週1回で2時間続きの総合の授業が行われている。この時間を活用して文京区本郷にあるサッカーミュージアムを見学した。



サッカーミュージアム内で観賞中

IV. その他

本校の通常の授業（保健体育科以外も含む）や学校行事、生徒会活動など様々なところにおいて、オリンピズムの理念に基づく、または関連する活動は行われているのではないかとと思われる。そういった内容を改めて整理することで、オリンピック教育の概念を広げたり、または深めたりできる可能性も出てくるのではないだろうか。今まで行われてきた活動の意義をオリンピック教育という角度からも評価できると考える。

V. 過去の取り組み

1. 全校生徒を対象とした講演会

2008年度 「北京オリンピック・パラリンピック メダリスト報告会」

山口香氏・河合純一・宮下純一氏・谷本歩実氏

2009年度 河野一郎氏 2016年東京オリンピック招致に向けて

2010年度 秋葉忠利氏「オリンピックと国際平和を考える」当時広島市長（附属高校卒業生）

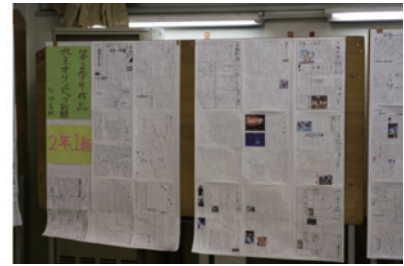
2. スポーツコラム（全校生徒に配布）

オリンピックに関連する事項の紹介

（例）古代オリンピック、北京オリンピック聖火リレーなど

3. 2008年北京オリンピック新聞

2008年の学芸発表会において、当時の2学年全員分の個人作品を展示した。



北京オリンピック新聞展示

4. 2009年運動会での取り組み

運動会をオリンピズムの理念と関連させて、準備期間も含めて取り組んだ。例として、優勝チームに生徒が手作りをした月桂冠（本校には月桂樹が生えている）を贈ったこと、フェアプレーの精神を全校生徒になげかけたことなど、オリンピックと様々なかたちで結びつけて運営していた。また、夏季休業中には、オリンピックに関する情報収集のために運動会の準備委員生徒と国立競技場内にあるスポーツ博物館に足を運んだ。



2009年運動会スローガン

5. 国立競技場、秩父宮記念スポーツ博物館、明治公園

3年生での総合学習の時間において、1964年東京オリンピックメイン会場である国立競技場において、実際に身体活動を通して、雰囲気や肌で何かを感じることを、併設されているスポーツ博物館で自身が興味あるスポーツ史の一端を学ぶことをねらいとして取り組んだ。

さらに、国立競技場と東京体育館の間にある細長い公園（明治公園）の霞ヶ丘競技場正面辺りにある石碑（競技場に向かって右側にあるのは、日本オリンピック委員会初代会長、柔道の創始者であって本校の校長に長く務められた嘉納治五郎先生、左側には、近代オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタン男爵）を見て回った。



2009年運動会スローガン



100m 走に挑む



秩父宮記念スポーツ博物館内にある表彰台の上で

（文責：附属中学校 長岡 樹）

(3) 附属高校における「オリンピック教育」

本校にはまだ「オリンピック教育」を担う組織はないが、かねてより保健体育科の授業を中心に、「オリンピック教育」と呼べるような活動が行われている。2011年度に限定するなら、「総合的な学習」として取り組んだり、「国際ユースフォーラム」に参加したりと、かなり活発に展開したと言えるだろう。以下、簡単に報告したい。

I. 1、2年次の保健・体育理論の授業

本校の保健体育科の授業は、体育実技8単位（1年次2単位、2年次3単位、3年時3単位）と保健2単位で構成されている。このうち保健の2単位は、教科書の保健編と体育編を修めることとしており、「オリンピック教育」は通年の体育理論の授業の中で展開されている。

筑波大学との併任助教である宮崎明世が担当するクラスでは、2010年度のCORE発足初年度より、5時間を「オリンピック教育」に充てている。2010年度は「オリンピック競技大会とは」「日本とオリンピック」「古代オリンピック」「オリンピックとフェアプレー」の講義ののち、1988、1992両冬季五輪に出場した河合季信氏（筑波大学人間総合科学研究科准教授）の講演が企画された。生徒はオリンピック（かつメダリスト）の言葉に耳を傾け、オリンピックの意義について学習した。2011年度の「古代オリンピック」の授業では実技を交えて行うなど、さまざまな工夫が施されている。

なお、体育理論を担当する中塚義実、鮫島元成の両教諭においても、取り上げるトピックや時間数に違いはあるが、いずれも「オリンピック教育」が為されている。

II. 3年次の総合的な学習「オリンピックと教育・スポーツ」の授業

3年次の総合的な学習として標記講座を開講、5名の生徒が選択し、中塚の指導のもとで、かなり密度の濃い「オリンピック教育」に取り組んだ（次ページ「授業概要」参照）。

III. 第8回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの派遣

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）の事業として、2名の生徒と1名の教員が参加した（本報告書「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムに参加して」参照）。

主 催：国際ピエール・ド・クーベルタン委員会 ホスト校：北京第四中学校

期 日：8月13日～21日（9泊10日）

派遣生徒2名（山西優香＝3年生、星野慧＝2年生）、引率教員1名（中塚義実＝保健体育科）

IV. その他

「オリンピック教育」を広くとらえるなら、本校の体育実技の授業、スポーツ大会や対学習院総合定期戦などの行事、あるいは日々の部活動なども「オリンピック教育」に含めることができるだろう。それは、これらの活動は技能の向上を目指すだけでなく、スポーツを通じた人間形成に寄与すべく構成、指導されているからである。

日本の学校体育のルーツ校とも言える東京高等師範学校、その附属学校であるわれわれは、「オリンピック教育」においてもルーツ校であると言えるだろう。新しい取り組みをはじめただけでなく、既存の取り組みを「オリンピック教育」の視点からとらえなおし、再評価することも重要である。

3年総合「オリンピックと教育・スポーツ」 授業概要

2011.12.4

回数	月日	活動概要		備考
0	前年度	ニーズの把握	受講者5名の顔合わせと抱負・希望の把握	
1	4/15	ガイダンス&講義①	全体村インテ-ジョン&各自の問題意識の披露 講義①日本と世界の体育・スポーツー 古代オリンピック祭から近代オリンピックまで	
×	4/22	校外活動①	嘉納治五郎の思想と功績①ー 講道館訪問 ー 講師：鯨島元成先生=本校保健体育科教諭/柔道部顧問	12:30 武道館集合 →講義を受けて移動
2	4/29	昭和の日		
3	5/6	講義②	嘉納治五郎の思想と功績② ー 講師：真田久先生=筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長	
4	5/13	討論①	本校の部活動の歴史と現状①ー 主に学習院戦をめぐる	受講生の話題提供と討議
5	5/20	校外活動②	秩父宮記念スポーツ博物館訪問&国立競技場見学	12:30 体育科集合 → 移動(現地解散)
6	5/27	討論②	本校の部活動の歴史と現状②ー 学習院戦以外の競技会と各部の現状	受講生の話題提供と討議
7	6/3	討論③	体育・スポーツ系の大学・大学院で何を学ぶか	教生3名の話題提供と討議
8	6/10	講義③	クーベルタンの思想と功績&ユースフォーラムについて ー 講師：田原淳子先生=国士舘大学/国際オリンピック委員会理事	6,7限目に開講。7限目は受講生以外にも公開
9	6/17	研究活動①	5分程度で研究計画をプレゼン&ディスカッション	
10	6/24	研究活動②	指導教諭のアドバイスを受けながら、各自の研究を進める (於体育科、図書館、情報教室他)	最初と最後に集まり、意見交換
11	7/1	研究活動③		
12	7/8	研究活動④	各自10~15分程度の中間報告	
13	8/26	研究活動⑤	クーベルタン・ユースフォーラム報告/桐陰祭準備(ポスター発表)	夏季休暇中の特別授業
14	9/2	研究活動⑥	桐陰祭準備(ポスター発表とレポート展示)	
×	9/9	桐陰祭前日準備	桐陰祭準備(発表会場の準備)	
15	9/16	研究活動⑦	研究レポートの作成(前期中に提出)	
×	9/23	秋分の日		
×	9/30	前期末試験		
×	10/7	秋休み		
×	10/14	スポーツ大会		
×	10/21	全附連研究大会		
16	10/28	研究発表会①	各自15分程度の研究発表&ディスカッション	受講者以外にも公開(?)
17	11/4	研究発表会②		
18	11/11	校外活動③	JFAハウス(日本サッカーミュージアム&日本サッカー協会・Jリーグ事務局等)訪問	13:00 体育科集合 → 移動(現地解散)
19	11/18	校外活動④	東京ドーム内・野球体育博物館訪問	13:10 体育科集合 → 移動(現地解散)
×	11/25	校外学習		
20	12/2	まとめ	ナショナルトレーニングセンター訪問/まとめ	12:30 体育科集合 → 移動(現地解散)

(文責：附属高等学校 中塚 義美)

(4) 附属駒場中・高等学校におけるオリンピック教育 ～筑駒とオリンピック～

科学オリンピックで活躍する生徒が多数在籍する附属駒場だが、スポーツのオリンピックに関わる活動も行われている。

1. オリンピアンによる講演会



これまでにオリンピックによる講演会を3回実施している。

2008年度に実施した筑波大学附属駒場中・高等学校主催、世田谷区教育委員会共催、目黒区教育委員会後援の筑波大学社会貢献プロジェクト筑駒アカデメイアの講演会で、山口香先生に「柔道と人間教育-オリンピック強化の現場から」という題目で講演していただいた。

漫画「YAWARA!」のモデルともなった山口香先生の講演は歯切れが良く、内容の面白さも

手伝って、多くの方々の共感を呼び、現代教育が失っている問題が具体的に示される講演会となった。

本校中高生の他、本校の保護者、目黒区、世田谷区在住の地域の住民の方から多くの参加があった。

2008年度にスーパーサイエンスハイスクール研究の「科学者・技術者に必要な幅広い科学的リテラシーを育てるプログラムの実施」として村木征人先生に「スポーツトレーニングにおける体力・技術の相補性」という題目で講演していただいた。

保体科主催としては初めての講演会であり、生徒に多数参加してもらおうと企画した。期待通り、サッカー部・野球部・バスケットボール部・理上部など運動部員でスポーツ好きで実践している多数の生徒が参加した。

内容は、トレーニングの中心課題でありながら、一面的・断片的に扱われる傾向にある体力および技術トレーニングについて、不可分な全体としての運動の相対性および相補性原理の観点から、最大下負荷でのトレーニング意義について講演していただいた。

生徒の事後アンケートによると、「最大限頑張るよりも、全力マイナス数パーセントの力でトレーニングすると最大の効果が得られる」「ウエイトトレーニングにおいてもただ負荷をかけて学ぶ技術や心がある」「ハンマー投げの練習で軽めのハンマーで投擲練習すると効果的である」「アップのような低負荷の練習における技術練習が効果的」「自分の専門競技だけでなく、それ以外の競技をする、見ることでわかることがある」など生徒のこれまでの常識を覆すような内容を含んでいたが、具体的なデータ・体験談を交えて講演していただき、これからの練習に役





立てることができる、できそうだと述べている。

授業がない土曜日にもかかわらず、中学1年生7名、2年生11名、3年生26名、高校1年生18名、2年生16名計78名が参加した。誰もが走れることを題材に、これまでの速く走るためのアスリートの挑戦をわかりやすく紹介したものだ。特にスプリント及びジョギ

ング、立位姿勢の特性に着目しながらヒトの運動学習を見直したものだ。本校では全学年で姿勢授業を実施しており、内容もわかりやすく好評であった。

生徒の事後アンケートによると、「今までは腕の振りやモモをあげることを意識していたけれども着地した時の形に着目するのは初めてだったので面白かった。(中2)」「今まで歩幅を大きくすることを意識して走ってきましたが、ピッチが重要であると知り、意識してみようと思いました。フォームも重要であると改めて思いました。(中3)」「走り方、歩き方など日常の生活で普段全く意識していないことを意識するきっかけになってよかった。(中3)」「ゴールデンエイジを過ぎた僕達にとって身体の運動能力を高めるには身体の動きを理解するしかない。例えば走るという動作に関しては着地時の後ろ足が前にあるなどである。このようなことを意識するだけでなくさらに実践していきながら覚えていくことが必要である。ただ全力を出しながらだと意識することができないので歩くときなどにも考えながらやるべきだと分かった(高1)」など生徒のこれまで実践や授業の体験をふまえた内容が多くこれからの練習や学習に役立てることができる、できそうだとの回答が多くあった。

2. 東京オリンピック世界制覇「東洋の魔女」にゆかりのある本校体育館

「東洋の魔女」と呼ばれた女子バレーボールチーム日本代表は1962年の世界選手権で優勝、五輪直前まで157連勝をつづけており、金メダル確実といわれていた。それだけに国民の期待も大きく、その女子バレー決勝線の試合のテレビ視聴率は66.8%にも達したという。結果は、息の合ったチームプレーと柔道の受け身を応用した回転レシーブを駆使する日本チームが、3-0のストレートでソ連に決勝。「鬼」と呼ばれた大松博文監督は、選手達の「根性」が勝因だと語ったという。

本校60周年記念誌によると本校15期生が高校1年生のときに東京オリンピックが開かれ、体育館が新築された。東洋の魔女が練習したというゆかりのある体育館である。

次の文章は60周年記念誌から抜粋した文章である。

『オリンピックという言葉にどこの大会を思い浮かべるかで世代を分けられるという。

15期のオリンピックの記憶は、間違いなく東京。1964年、私たちは高校1年。「オリンピックを成功させよう」との合言葉が日本中に響き、街は建設ラッシュに沸いていた。新幹線もオリンピック直前には開通。そして10月10日、これ以上ない好天のもとに開会式を迎えた。』

『学校でも、屋内体育館がオリンピックに間に合わせるように完成した。体育館など今では珍しくないが、それまで駒場には体育館というものはなく、体育の授業も運動部系のクラブ活動も運動場でやっていたのだから(雨の日の授業はどうなっていたのだろう!)バレーコートが2面もあるびかびかの巨大体育館落成は驚きの出来事だった。

しかも、この体育館はバレーボールチームの練習場として使われることになっており、実際、いくつかのオリンピックチームがやってきた。強豪ソ連もやってきた。リスカルというめだって美人の選



手がいた。大松監督率いる東洋の魔女もやってきた。選手の中ではサウスポーの宮本の人気が高かった。一行の姿を一目見ようと、路にも窓にも大勢の生徒が詰めかけ校門から体育館までのわずかな移動の間に、歓声をあげ写真を撮った。体育館入り口のすきまや掃き出し口から覗き込んだ記憶も多くの者にある。「日によっては見学が制限されたけど、一般見学が可で体育館の中まで入ることのできる日もあった」(以上 60 周年記念誌より抜粋)

女子バレーボールチームが本校の体育館を練習場として使用したことは、保健体育の時間では、入学時のオリエンテーションで生徒に伝えてはいるが、強調してはいない。生徒がいつも使用している体育館がオリンピックにゆかりのある場所であるならばもっと話を伝えて生徒たちに興味を持たせていくのも面白そうである。今後取り組みを検討していきたい。

3. 筑駒スポーツ新聞作り

本校の保健体育の授業ではスポーツをするだけでなく「みる」こと、「ささえる」ことにも重点を置いている。スポーツは「できる」だけが評価されがちであった。しかし、スポーツ的能力には、スポーツが「できる」だけでなく、スポーツを「みる」能力（これは単に観戦するだけでなく、分析する能力まで含んだもの）や、スポーツを「ささえる」、つまり運営する能力（学校では体育祭実行委員や競技大会運営委員などがその例）がある。こうした能力を育成していくこともこれからの体育であり、そうした授業展開の一つに「スポーツ新聞をつくる」がある。



次の文章は生徒配布資料から抜粋した文章である。

(2010 年冬季五輪：バンクーバー 2010 年 2 月 13 日～ 3 月 1 日)

「する」「みる」「ささえる」

ゲーム観戦→スポーツを楽しむ（多くの人々のライフスタイルの一部となっている）→生涯スポーツ

2つの「みる」



ライブスポーツ直接会場へ

迫力・自分の好きなどところ注目する（例：テニスのフットワーク）

応援することを楽しむメディアスポーツ 最近はプレイを様々な角度から分析してくれる

「みる」をさらに深め「かたる（語る）」

これもスポーツを楽しむために大切なこと。

（生涯スポーツへ発展させるため）

○みるスポーツに関連して、様々な物語が書物や新聞・雑誌、テレビやラジオそしてインターネットの中で語られている。

今回の課題は、新聞！

読む人に不快感を与えないことは基本中の基本！

また体育・スポーツをするのが苦手な生徒でも試合をみたり、雑誌や本を読むのが好きで深い知識を持っているものもおりスポーツ新聞づくりを行うことで、そういった生徒にとって活躍の場ができることになる。

生徒の中にはレイアウトが非常にきれいに構成できるものや、文章をうまく書くものもおり、スポーツを題材に能力を活かして情報発信し、スポーツと関わるができるようになる。

スポーツ新聞づくりにより主体的に興味をもったことを調べ、他者へわかりやすいように伝えられるように工夫し、その過程を経てスポーツに関わる知識を身に着けることができる。発表会を設定しお互いに作品を鑑賞できれば知識を共有することができる。

またすべて授業時間に行うのではなく、長期休暇中の課題をだすという方法もある。

例えば次の2012年ロンドンオリンピックであれば7月27日から8月12日まで開催される予定なので、本校の学校暦で言えば夏季休暇中である。そのため1学期中に授業でロンドンオリンピックについて取り上げ、スポーツ新聞づくりを夏季休暇中の課題として2学期に提出させるということも方法の一つである。

また合科型総合学習という方法もある。2002年度の1学期に本校の社会科では、中学2年生を対象に、「歴史・地理でみるワールドカップ」の授業が展開された。生徒は、まずサッカーワールドカップ出場国のうちからどこか1か国を決めて、サッカーワールドカップが始まる前までにその国の歴史と地理を調べ、レポートした。そして保健体育科が社会科と連携をとりながら、同様にその国のチーム分析を行ってまとめる「スポーツ新聞をつくる」、言い換えれば「スポーツジャーナリストにな

る」「スポーツアナリストになる」の授業を行った。このような授業展開をオリンピックにおいても可能であると考えられる。

これまでも「スポーツをよむ」として、このような授業を実施してきたが、バンクーバー冬季五輪についても成功したと考えている。今まで、オリンピックに関心の乏しかった生徒もこれを機にオリンピックのことを知り、多くのスポーツにも関心が向くようになった。また、異国のことを知る良い機会になった。そして、多くの生徒が新聞作成の大変さや、達成感が大きかったことなどを、授業後の感想として述べていた。

4. オリンピック種目の解説授業

オリンピックを楽しむためには、競技種目のことを知っておく必要がある。オリンピックの期間中にもし保健体育の授業でグラウンド種目がある場合、競技種目について解説授業を行うチャンスである。

グラウンド種目の競技で雨天時に授業計画を変更せざるを得ない場合、オリンピック期間中であればオリンピック関連の副案を準備しておくのである。

オリンピック期間中はテレビや新聞、インターネットでオリンピックに関する情報が溢れている状態になる。生徒たちの会話からもオリンピックに関する話題が聞こえてくるようになる。

体育嫌い、スポーツ嫌いの生徒でも興味関心が高まる時期であり、そのタイミングでオリンピック種目の解説授業を行うことで生徒の学ぶ意欲を高められる。



また体育・スポーツをするのが苦手な生徒でも試合をみたり、雑誌をよむのが好きで多くの知識を知っているものもあり、オリンピック種目の解説授業を行うことにより、他の生徒に知識を教える場をつくることにもなる。

高校2年生を担当していた横尾は保健体育の教材として生徒が購入している「イラストでみる最新スポーツルール」を用いて、スケートの歴史と発展についてや競技の特性について取り上げた。「フィギュアスケートが、氷上にスケートのエッジで描いた曲線の図形のよしあしと、安定した美しいフォーム、ある程度のスピードをもった滑走などでその優劣を競うスポーツ」と教材には紹介されているが、生徒たちは意外とそういうことを知らない。

授業では(財)日本スケート連盟がホームページで解説しているスピンの基礎など技術を解説しながら、実際に教師が実演してみせると生徒は喜ぶ。もちろんスケート靴は履いていない状態なのだが、「トリプルアクセルだ」「アクセルとルッツの違いはこうだ」と言って回転ジャンプをしてみせると生徒にとって面白くわかりやすい。

(5) 附属坂戸高等学校における「オリンピック教育」～附属坂戸高校のとりのくみ～

本校では、平成23年1月に真田先生（筑波大学）を講師として招き、長野冬季オリンピックの際に行われた「世界に広がる一校一国運動」をテーマとして、オリンピック教育講演会を実施した。「一校一国運動」とは、五輪開催地の学校が応援する国、地域を決め、文化や言葉を学んだり、その国の子どもたちや選手らと交流したりして異文化への理解を深める活動である。94年広島アジア大会で行われた公民館単位で応援する「一館一国・地域の応援事業」をモデルに、98年長野冬季五輪から始まったものであり、草の根レベルの交流として国際オリンピック委員会からも高い評価を受け、00年シドニー大会、02年ソルトレーク、06年トリノの両冬季大会に引き継がれた。この「一校一国運動」の講演を聴いて、生徒たちは、オリンピックについての知識や意義について、また国際交流、国際親善について考え、国際平和や国際的視点を持つことの必要性を考えるよい機会となったと思う。真田先生と共に来校されたヤロスラフ・カラカイ君（ウクライナ工科大学学生）にも講演会に参加してもらい、オリンピックとの関わりや意義を話してもらった。生徒たちは、海外からの学生のお客さんに興味津々で、生徒自らヤロスラフ君にオリンピックのことに限らず、他のいろいろなことについて聞きながら、国際交流をしていた。

さらに本校では、オリンピック教育プラットフォームがまだ設立される前であるが、平成14年12月に、生徒指導部主催の講演会として「オリンピック選手の生き様に学ぶ」と題して、講演会を実施している。この時も、真田先生に講師をお願いし、全校生徒を対象として講演していただいた。オリンピックの金栗四三の人生を通して、日本がいつからオリンピックに参加したかや、親大学筑波大学の前身東京高等師範学校について、またオリンピックの人生、生き方について学び、自分の今後の在り方、生き方について考えるよい機会となった。

本校では、上記のような単発的な行事は行っているが、年間を通じての継続的なオリンピック教育はまだ実施できていない。オリンピック教育の質を高めるために、COREの掲げるオリンピック教育の実践内容である、①オリンピックの理念（オリンピズム）と歴史の学習、②オリンピックに関連した文化や社会問題等に関する学習、③オリンピックの精神やスポーツの価値についての学習等をどこに入れていくかまだ検討中である。しかしながら本校は総合学科ということもあり、普通科高校よりも授業の自由度が高い。①や②は、現在1年次で行われている学校指定科目キャリアデザイン（通称：ピューパ）や2年次の総合的学習の時間、さらに3年次の卒業研究等で実践できないか検討している。また、③については今までの体育の授業の中で実践してきていることである。球技等で試合前後に必ず礼をし、相手の敬う気持ちを忘れないことや武道での礼儀作法、切磋琢磨の精神は、すべてオリンピック教育に繋がっていると考えられる。さらに運動部の部活の指導方針の中には、フェアプレイの精神やリーダーシップ、フォロアーシップ、スポーツマンシップ等、オリンピック教育と意識していなくてもそれが多く入っていることは事実である。これらのことをオリンピズムにどう発展させていくか、生徒たちに体育、スポーツを通して、結果よりも努力することの過程が大切であり、それが人間を作っていく事を教え、生徒自身にどのような人生哲学を創造させるかを考えながら、今後もオリンピック教育を実践していきたいと考えている。

（文責：附属坂戸高等学校 平田 佳弘）

(6) 附属視覚特別支援学校における「オリンピック教育」

～附属視覚特別支援学校におけるとりくみ～

本校ではこれといった特別な指導をしていないが、日頃の生活の中で関わりのあると思われる事を紹介する。

毎年高等部2年時、総合的な学習において、1時間を障害者スポーツの紹介を開講する。

障害者スポーツの紹介と、その中で視覚障害者のスポーツの種類と組織や大会の概要を説明して、生徒たちに生涯スポーツの重要性（保健分野）を自分と重ね合わせて考えることを目的としている。

2009年9月10日から13日に 東京でアジアパラユースゲームが開催された。

アジアの各国から、19歳以下の選手が集まり・水泳・陸上・卓球・ゴールボール・ボッチャ・車椅子テニスの6競技が競われた。

本校では、約2年前から部員達に大会がある事を知らせ、希望者を強化した。

水泳・陸上・ゴールボールの3競技に7人の選手が日本代表として参加した。



水泳競技では、卒業生を含み5人の選手が参加した。

海外の選手とユニフォーム交換をして、語学などに興味を持った生徒が増えた。

2013年の韓国大会に向けて、練習を積み重ねている。

鍼灸科には入学の際、外国人枠があり、毎年アジア諸国から数人の留学生が入学する。

教員以外にクラスメイトと勉強や生活を共にしているために、近年は国際色豊かになった。

また、タイやインドのアジア諸国に行き、鍼灸の教育支援も行っている。

2010年3月に本校高等部 国際交流部が韓国ソウル盲学校に行き交流を行った。

学校の授業見学をして、文化について情報交換を行った。

その後もアジアを知るための活動をしている。

本校におけるクラブ活動

本校の中学部・高等部（専攻科を含む）は運動系クラブと文化系クラブがある。

運動系クラブは中学部には、陸上部・水泳部・フローバレーボール部・S T T（サウンドテーブル

テニス)部が活動している。高等部には中学部の他に、ゴールボール部と野球(グランドソフトボール)部とボーリング部が活動している。また寄宿舎には、サッカー同好会がある。

中学部のクラブは週に1日、時間割の中に組み込まれて活動をしている。

高等部以上のクラブは、各々のクラブで練習日と練習時間を計画し、クラブ中立委員会で調整後(練習場所重複を避けるため)、活動をしている。

本校における参加大会

関東地区の盲学校が集まり年1回、大会を開催する。本校では1年間の練習の成果を確認する大会と位置づけている。(盲学校が主管する大会)

関東地区盲学校ゴールボール大会

関東地区盲学校水泳大会

関東地区盲学校中学部フロアーバレーボール大会

関東地区盲学校高等部フロアーバレーボール大会

関東地区盲学校卓球大会

関東地区盲学校陸上大会

関東地区盲学校グランドソフトボール大会

関東地区盲学校グランドソフトボール大会で優勝すると全国盲学校野球大会の出場資格が得られる。

全国盲学校野球大会(出場資格がある時に参加)

全国障害者スポーツ大会の地域予選大会で、日頃から練習に取り組んで来た生徒が参加する。(各都道府県が開催)東京都の上位の結果を残すと、その年の秋の全国障害者スポーツ大会に東京都(出身地)代表選手として派遣される。

東京都障害者スポーツ大会(水泳)

東京都障害者スポーツ大会(卓球)

東京都障害者スポーツ大会(陸上)

東京都障害者スポーツ大会(野球)

全国障害者スポーツ大会(地域代表選手に選ばれた時に参加)

東京都障害者総合スポーツセンターが開催する大会で、日頃から練習に取り組んで来た生徒が参加する。

障害者スポーツセンター水泳大会

障害者スポーツセンター陸上大会

各競技団体に個人で選手登録をして参加する大会で、日頃から練習に取り組んで来た生徒が参加する。競技レベルはかなり高い。

陸上では

関東身体障害者陸上選手権大会

日本身体障害者陸上選手権大会

ジャパンパラリンピック陸上大会（標準記録を突破が参加条件）

水泳では

関東身体障害者水泳選手権大会

日本身体障害者水泳選手権大会（標準記録を突破が参加条件）

ジャパンパラリンピック水泳大会（標準記録を突破が参加条件）

ゴールボールでは

男子東日本ゴールボール大会・女子一次予選ゴールボール大会

日本選手権最終予選ゴールボール大会

日本選手権ゴールボール大会

柔道では

全国視覚障害者柔道大会

フロアーバレーボールでは

社会人を対象に全国フロアーバレーボール大会も開催されている。

本校の生徒で競技に一生懸命取り組む者は（卒業生を含む）上記の大会等に参加している。

参加生徒の参加費や遠征費など自己負担が多いため、本校後援会やメルリランチ日本証券株式会社から費用の一部を補助してもらっている。

月曜日と金曜日の18時から、中学生以上の在學生と卒業生の有志で集まり、1時間視覚障害者が安全に出来る筋力トレーニングを体育館で行っている。

トレーニングは自由参加だが参加する条件として、入り口で元気よく挨拶をすることが課せられている。またトレーニング終了前にコミュニケーションゲームを導入し、身体以外の面でも経験を積ませている。

本校（卒業生を含む）からパラリンピックに参加した選手 ◎印は在校生時に参加

1980	アーヘン	陸上	◎村松正文
1984	ニューヨーク	陸上	◎島津良範
1988	ソウル	陸上	◎大東導正
1995	バルセロナ	水泳	◎河合純一 ◎植田聖
1996	アトランタ	水泳	河合純一
2000	シドニー	陸上	今井裕二 ◎星野直志
		水泳	河合純一
2004	アテネ	水泳	◎秋山里奈 ◎酒井喜和 河合純一
		陸上	◎斉藤晃司 福原良英
		柔道	◎加藤裕司
		ゴールボール	◎浅井三重子

2008 北京

水泳 ◎木村敬一 秋山里奈 河合純一

ゴールボール 浅井三重子 高田朋枝

以上の生徒たちがパラリンピックに参加した。

同級生や同クラブの生徒たちに、練習に取り組む姿勢や大会の様子・結果など、多くの影響力を与えている。自分も報告の機会がある時に、パラリンピックの競技の様子や選手村の様子を生徒たちに報告するように心がけている。

現状の問題点と今後の課題

本校生徒は視覚にハンディキャップがある為に、世の中の視覚的情報量が少ない。その為に日頃の学校生活や勉強が、日々自己へのチャレンジ的要素が多い。

そして健常者の社会に出て自立をする為に、習得しなければならないことが多く、あまりゆとりも無い生徒が多い。教科学習に追われクラブに真剣に取り組める生徒が少ない。これは生徒だけでなく教員側にも同じ側面があり、全てのクラブ活動が盛んに行われている訳では無い。クラブ顧問の熱意一つで変わってしまう現状である。教科でも課外授業でも、指導する側の時間不足が影響し、大会引率等にも支障が出てきている。この点をどのように改善していくか、また、良い方法を模索しないと出来ない。

(文責：附属視覚特別支援学校 寺西 真人)

(7) 附属聴覚特別支援学校における「オリンピック教育」

1. 小学部について

本校は、進んで自分の能力を開発し、広い視野に立って文化的生産的活動の発展に寄与できる人格の育成に努めることを目標としている。そして、この目標を達成するため、小学部では聞こえる子どもたちと同じ教育課程によって教科の学習を進め同年齢の聞こえる子どもと同等の学力が維持できるように努めている。

2. オリンピック教育 [1] 『バスケットボール教室』

①特別活動の【スポーツ】について

高学年では、特別活動の時間に委員会活動やクラブ活動を行っている。一学年約12名の児童が在籍しているが、運動は人数が集まらなければ活動できない種目が多い為、運動に関するクラブはなく、別に【スポーツ】の時間を設けている。月に1回(90分)の活動ではあるが、年間を通して同じ班で活動を行い、結束力・連帯感が高まるよう配慮している。

取り組む種目は、バスケットボールやバドミントン、大縄跳び等である。その中でも、バスケットボールは3月にバスケットボール大会を実施しており、1、2月には体育の授業でも学年毎に練習を行っている為、最も盛り上がる種目である。

そこで、今年度は、JBL (JAPAN BASKETBALL LEAGUE) に所属するプロバスケットボールチーム『日立サンロッカーズ』に依頼し、協力を得て、【スポーツ】の時間に本校体育館で初めて『バスケットボール教室』を開催することになった。

②『バスケットボール教室』について

7月1日、日立サンロッカーズからは、選手3名・スタッフ1名の4名の方が来てくださった。選手は、3名とも190cmを越す長身の選手で、児童は選手の登場から目を丸くし、目を輝かせ、大きな歓声を上げていた。

4年生は初めてバスケットボールに取り組むので、内容はドリブルやシュートの基本的なことを中心に指導して頂き、ダンクシュートやスリーポイントシュート等のデモンストレーションを見せて頂く予定だった。けれども、「バスケットボールの楽しさをゲームを通して伝えたい」という日立サンロッカーズ側の申し出で、児童のレベルに合わせたミニゲーム(選手3名対児童5名、順番に児童全員が対戦)も臨機応変に加えて頂いた。

説明は、文字カードを用いたり、見本を示したりして頂くことで、児童は集中して話を聞き、内容もよく理解していた。また、レイアップシュートやセットシュートは、見本を示して頂いたことにより、児童は良い動きのイメージを持って練習に取り組むことができた。

③『バスケットボール教室』を実施して

体育の授業でも、ドリブルやシュートの練習は行っている。だが、プロ選手のプレーを実際に見ることによって、練習に臨む態度・意欲は激変した。特に、バスケットボールを苦手とし、練習では友達の様子を見ていたり、ゲームではコートの上端に立っているだけのことが多かったりする子が、笑顔でボールを追いかけ、積極的に練習に取り組んでいる姿が印象的だった。

3学期になり、体育でもバスケットボールの授業を開始した。バスケットボール教室から半年経っているものの、例年に比べ意欲的に練習に取り組み、チームで熱心に作戦を考え、声を掛け合いなが



説明を聞く児童の様子



ミニゲームの様子

らプレーしているように感じる。やはり、テレビの画面を通してではなく、実際にプロ選手から指導を受け、プレーを見たことは、時間が経っても強く心に響き、深く心に残っているのだと思う。

④今後について

3月には、希望者のみではあるが、日立サンロッカーズの試合を観戦しに行く予定である。小学生だからこそ、今後も話を聞くだけでなく、実際に体を動かし、自分の目でトップレベルの選手のプレーを見る機会を作っていきたいと思う。そして、そこからスポーツへの興味・関心を広げ、努力していくことの大切さや友達と協力してプレーする楽しさを感じることで、色々なことに挑戦する気持ちを育てていきたいと思う。

3. オリンピック教育〔2〕『オリンピックに関する調べ学習』

①保健の授業について

小学部では、3、4年生は3学期になると週1回30分、5、6年生は通年で週1回30分、保健の授業を行っている。授業では、教科書以外の絵や図、写真を用いたり、養護教諭の特別授業を設けたり、パソコンで調べ学習を行ったりする等、児童の理解が深まるよう工夫している。

②『オリンピックに関する調べ学習』について

今年は、オリンピックイヤーでもあることから、6年生は3月の保健の授業の時間に、オリンピックに関する調べ学習を2回行う予定である。1回目の授業では、オリンピックの歴史について、オリンピック開催国について、オリンピック選手について等、児童の興味によって3～4グループに分かれてパソコンで調べ学習を行う。2回目の授業では、調べたことをまとめ、簡単に発表する予定である。

(文責：附属聴覚特別支援学校 苦瓜 道代)

(8) 附属大塚特別支援学校における「オリンピック教育」

オリンピック教育推進専門委員会委員は、校内の組織として学校の国際教育研究と関連しているが、具体的な話し合いはできていないというのが現状である。しかし、各学部（幼稚部、小学部、中学部、高等部）の体育の担当教員を中心にして、各部毎の「オリンピック教育」についての意見や要望をまとめた。その上で、体育の担当教員で、本校の「オリンピック教育」について、本校における「オリンピック教育」の定義、オリンピック教育に関する実践、今後期待することを以下にまとめた。

1、本校における「オリンピック教育」の定義（案）

「身体活動を通して、年齢、地域、国籍、文化など様々な異なる環境に触れながら、友情、連帯感を体感する」こと。

2、オリンピック教育に関連する実践

<行事や大会>

- ・筑波大学・陸上競技部の学生との交流<高等部>
- ・東京都特別支援学校総合体育大会への参加<中学部・高等部>
- ・東京都障害者スポーツ大会への参加<高等部希望者>
- ・目白ロードレースへの参加<中学部・高等部希望者>
- ・附属小学校との交流会<小学部>
- ・JICA 南米3カ国特別支援教育研修における、研修生との交流<全校>

<主なねらい>

- ・競技の魅力を味わったり、憧れを抱いたりする。
- ・トップレベルの競技に触れたり、実際に体験したりする。
- ・大会に向けて練習したり、努力したりする。
- ・普段と異なる環境で、体を動かす、力を発揮する経験をする。
- ・年齢の異なる人や国籍の異なる人と体を動かす、関わる。

3、今後、期待することなど

- ・一流の選手の実技を目の前で見ることができる機会がほしい。経験したことのある種目を中心に。（陸上競技、スキー、サッカー、野球、バレーボールなど）
- ・オリンピック、パラリンピック等に出場しているOB、OGに、各学校で講演をしてもらう。（障害者スポーツの普及、理解も含む）
- ・一流選手を招いての附属学校11校参加の運動会、交流会などを開催。

以上のように、実践をもとに定義づけをし、期待することを挙げた。「オリンピック教育」の定義については検討中であるが、全校で「オリンピック教育」についての共通理解を深めながら、今後の本校におけるオリンピック教育のあり方について考えていきたい。

（文責：附属大塚特別支援学校 遠藤 絵美）

(9) 附属桐が丘特別支援学校における「オリンピック教育」

筑波大学附属桐が丘特別支援学校（以下、当校）では、これまで「オリンピック教育」ということを明確に意図して行われた教育活動はない。

しかし、「スポーツやオリンピック（パラリンピック含む）を題材として、『国際理解を深め、国際平和の重要性を理解し、他者に貢献し得る力を養うための教育』という、筑波大学のオリンピック教育プラットフォーム（CORE）の位置づけや、①オリンピックの理念（オリンピズム）と歴史の学習、②オリンピックに関連した文化や社会問題等に関する学習、③オリンピックの精神やスポーツの価値についての学習という具体的な実践内容から改めて見直してみると、当校における体育の授業や運動会、ハンドサッカー部活動、東京都障害者スポーツ大会、高等部の総合的な学習における国際交流など、オリンピック教育の目標に合致する実践や行事はこれまでも行ってきた。以下に、オリンピック教育に関連する当校の授業実践・行事について記す。

桐が丘で行われているオリンピック教育に関連する授業実践・行事

○体育の授業

体育の授業内でオリンピックやパラリンピックの種目について映像を通して学習したり、パラリンピックの種目である「ボッチャ」を体育の教材として扱ったりしている。また、多くの単元を通じて、運動技能の向上だけでなく、他者と協力する態度や公平に試合に臨む態度などについても指導している。

○東京都障害者スポーツ大会

毎年6月初旬に駒沢オリンピック公園競技場で行われる陸上競技大会。桐が丘では、中学部・高等部の全生徒が参加し、4月から大会本番まで体育の授業で「陸上競技」の単元の中で、種目の練習を行う。また、この大会の結果によって、10月に行われる全国障害者スポーツ大会に出場する東京都代表に選出される可能性もあり、全国大会への出場は生徒の目標にもなっている。



電動車いすによるスラローム競技を行っている様子



山口大会に出場した高等部生徒（奥から3人目）
50m走で大会新記録を樹立した。

○運動会

毎年10月初旬に行われる。普段の体育の授業での成果を出す場であると同時に、学年を超えて実



小学部3・4年生による集団種目



中学部生徒によるリレー

施するリレーなどの競技種目では、先輩、後輩との協力が求められる貴重な機会となっている。また、互いに全力を出し合い勝敗を競い合う数少ない機会としても、当校の児童生徒たちにとって非常に重要な行事である。

○高等部ハンドサッカー部活動

毎年2月に駒沢オリンピック公園内の体育館に東京都の肢体不自由特別支援学校が集まり、東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会が行われる。大会への出場を目指し、桐が丘の高等部では、ハンドサッカー部活動を年間通じて行っている。目標とする大会に向けて、生徒がそれぞれの個人としての課題、チームとしての課題と向き合いながら、よりよい成績をおさめるために練習に励んでいる。同じ障害をもつ仲間と交流をもつ機会としても貴重で、OB・OGの活動も盛んに行われており、卒業後も生涯スポーツとして競技を続ける生徒もいる。

○総合的な学習の時間「国際交流」

高等部の総合的な学習の時間では、2学期に「国際交流」という内容で筑波大学に留学している外国人の方と文化交流を行っている。毎年、交流のためのテーマは生徒が設定するが、平成23年度はテーマの一つとして「スポーツ」を選定し、中国、タイ、メキシコ、ガボンからの留学生とそれぞれの国の伝統的なスポーツの紹介や体験学習を行った。生徒側は障害者スポーツとして、「ボッチャ」と「車いすスラローム」を紹介し、実際に留学生の方にも経験していただいた。



放課後の練習風景



平成21年度大会の様子



ガボンの留学生によるアフリカネーションズカップの説明（2012年大会でガボンは開催国になっている）



タイの留学生によるムエタイの説明（試合前の作法や祈りについて説明している様子）

3. まとめ

COREで位置づけているような「国際理解を深め、国際平和の重要性を理解し、他者に貢献し得る力を養うための教育」とまではいかないまでも、フェアプレイの精神、努力することの大切さ、他者に対する尊敬の念や友情、互いに理解し合うことの大変さなどは、これまでの当校の体育・スポーツに関する授業実践や行事を通じて児童生徒たちが学習していると考えられる。しかし、国際理解や異文化理解、国際平和などについては、現在の当校の取り組みの中では扱うことが難しかったり、行っている取り組みにしても、児童生徒が実感をもって学ぶというまでには至らなかったりする様子も見られる。また、「オリンピック教育」というと他教科の教員からは「体育」に関することと捉えられてしまったり、何を意図したものなのかが不明確だという意見も聞かれる。今後は、当校の児童生徒の実態を考慮し、オリンピック教育の目標を達成するために具体的にイメージしやすい教材を選定するとともに、体育の授業や行事だけでなく、社会科や道徳、特別活動などに関連させながら指導していくことで、当校の児童生徒の実態に合ったオリンピック教育が展開できるのではないかと考える。

（文責：附属桐が丘特別支援学校 花岡 勇太）

(10) 附属久里浜特別支援学校における「オリンピック教育」

1. 本校のオリンピック教育のねらい

オリンピックとは、なかなか接点が持ちにくい本校では、オリンピックの理念に基づき以下のようなねらいを考えた。

- ①障害児が気軽に楽しくスポーツに参加できる。
- ②幼児、児童が、体力を向上させて、約束を守り、相互に協力できるような経験をさせる。
- ③お互いを認めることから始めて、学級を超えて交流し合い、力を合わせる中でお互いを理解できるような経験をさせる。



駅伝が4位入賞

2. 具体的な取組

①朝の運動 毎日の学校生活で、体力を付けるために、各学級で、体育館を少し長めに走り、裏山へのマラソンを取入れる。最初はきつくても、最後まで走れなかった子供が、時間がたつと完走できるようになる。何事も継続は力なりだ。

②日常的な取組 日常的に少しでもスポーツに触れられるように、学校の中で、様々なスポーツ

を経験させる。自転車、一輪車乗り、ボールあそび、マスゲーム、バランスボールなど手軽にできるスポーツを経験させるようにした。また、運動会でも、ルールが分かりやすいゲームを用意し、約束を守りながらチームで行う。勝敗については余りこだわるのではなく、楽しみながら参加し、達成感が得られる内容にした。子供たちは見られていることを意識し、緊張感を持ちながら最後までやりきった。リレー種目は子供たちになかなか分かり難いが、支援もうけながら最後までバトンをつなぐことができた。

③講習会 スポーツの幅を広げるために、教員に向けて「Tボール講習会」を夏休み中に講師を招いて開いた。講習を受けた教員は、早速学級の中で取り組んだり、神奈川県内のTボール交流会に児童が参加したりして、対外的なつながりを持つきっかけになった。

③ 大会への参加 昨年度初めて神奈川県特別支援学校陸上大会（マラソン、駅伝）に一人が参加したが、今年度は学校として、大会に向けて練習し、初めて駅伝にもチャレンジした。

たすきをつなぐことができるかどうか心配した。結果は時間がとてもかかったが、見事完走した。

また、2kmのマラソンで、小3の児童が4位入賞を果たした。

3学期の始業式に表彰式を行ったが、誇らしげで、出場した子供たちがとてもうれしそうだった。

また、時を同じくして本校小学部5年生が、ホノルルマラソンに参加し、8時間53分19秒で完走した。

久里浜から横浜まで走り続けたことを幼児児童に伝えると感嘆の声があがった。

④余暇への広がり 本校幼稚部を修了し、小学校に入学した児童も、地域のマラソンサークルに父



マラソン



走り始め（快調快調）



完走証明書

親と参加した。大会出場を果たし、NHK の取材を受けるなど学校以外の余暇でもスポーツが広がり始めている。

（文責：附属久里浜特別支援学校 松本 末男）

8 オリンピック教育エッセー

(1) 「オリンピックがオリンピック教育に取り組む意義」

体育系准教授 山口 香

オリンピックに出場した経験のある者、現在目指している選手の中でどれだけの人間がオリンピックムーブメントの意味や意義などについて理解しているだろうか。恥ずかしい話だが、私自身、大学で教鞭をとり、オリンピックについての講義を担当する機会を得るまでは全くと言っていいほどに無知であった。古代オリンピックから近代オリンピックへのつながりやクーベルタン男爵の理想など、知れば知るほどに自分の知らなかったオリンピックの側面を見た思いであった。選手の時代にこういったことを学ぶ機会があったとすれば、おそらく勝ち負けやメダル以外の面からもオリンピックの価値を感じることができたであろうし、そうすることが競技の面でも良い影響を持てたのではないかと漠然と思う。

オリンピックスポーツは高度化し、メダル争いは熾烈である。幼少期から長い期間、専門的に厳しい訓練を続けている選手も少なくない。「スポーツの価値は勝ち負けだけではない」と屁屈ではわかっているが、オリンピックを目指している選手たちに他の価値観を理解させることは難しい。こういった現状に憂慮して国際オリンピック委員会は2010年にシンガポールで第1回夏季ユースオリンピック、2012年にインスブルックで冬季ユースオリンピック（いずれも14歳から18歳までが対象）をそれぞれ開催した。この大会は、競技はもちろんだが、教育・文化プログラム（CEP）も行われる。CEPはオリンピズム、能力の開発、幸福で健康的なライフスタイル、社会的責任、豊かな表現という5つのテーマに沿って進められる。こういった取り組みは、行き過ぎた勝利至上主義を是正するためにジュニア世代から教育していこうとする意図がみえる。

選手を引退して強く感じることは、オリンピックは出場して終わりではなく、そこからが始まりだということである。オリンピックに出場したオリンピックは生涯オリンピックとしての責任と自覚、誇りを持って生きていかなければならない。近年、一般的な興味関心の流れが速いこともあって、メダリストであろうと忘れられてしまうのが現実であるが、周りの人たちは忘れても自分自身がオリンピックであることを忘れることは決してない。オリンピックで経験したことの意味や価値はどこにあったのかを生涯考えながら生きて行くことになる。主には自問自答だろうが、もし自分の考えを発表する場があれば、そこには反応があり、振り返りが生まれる。そうした繰り返しが、考えを深めていくに違いない。そういう意味で、オリンピック教育には様々な手法があるだろうが、オリンピックを積極的に活用することは双方にとって非常に有意義であると考えている。

アスリート、元アスリートというのは、自分たちが活躍できた背景には多くの人たちの支援があったことを認識しており、何らかの形で社会に貢献し、恩返ししたいという気持ちを持っていると私は思う。しかしながら、残念なことに、そういった場を自分たちの手で作り上げたり、積極的に活動するのは苦手だ。アスリートは常に目標があって、それに向かって努力するのは得意だが、自ら目標を

設定するのは意外に難しい。そのため、アスリートやオリンピックを社会が生かすためには、彼らを生かすシステムの構築が必要である。女性のオリンピックが集う会で、1952年ヘルシンキ大会に出場した方にお目にかかって話を聞いたことがある。当たり前だが、恵まれない環境の中でどのように努力してきたかを聞いて思わず涙が出そうになったことを覚えている。こういった人たちこそがオリンピックのレガシーであり、その人たちの話を聞き、受け継いでいくことが一つのオリンピック教育の形ではないかと考える。

筑波大学付属学校におけるオリンピック教育はスタートしたばかりであるが、この試みが一つのモデルとなり、システムを構築し、全国の学校へと広がっていくことを願っている。そして、すべてのオリンピックがこのシステムの土台となり、歯車となっていければ素晴らしい。

(2) ユースオリンピックから感じた IOC の新しい取り組み

筑波大学体育系准教授 河合 季信

2012年1月13日～22日にオーストリア共和国・インスブルックにて開催された、第1回ユースオリンピック冬季競技大会（YOG）に日本選手団支援スタッフとして参加した。この大会は、次世代を担うアスリートを育成するために、IOC会長のジャック・ロゲ自らが旗振り役となって始まった大会である。第1回の夏季大会は2010年にシンガポールで開かれた。

YOGは、14～18才の若者を対象として行われ、参加者は競技と平行して文化・教育プログラム（CEP）という活動にも参加することに大きな特徴がある。

CEPの基本的な教育テーマは5つ。(1) オリンピズム、(2) スキル開発、(3) 健康的なライフスタイル、(4) 社会的責任、(5) 表現である。今回のインスブルック大会では、これら5つのテーマを6つのプロジェクトに落としこみ、参加したアスリートが自らの体験を通してそれぞれのテーマを体得していくことを目指していた。6つのプロジェクトは、それぞれ(1) メディア・ラボ、(2) ワールドマイル・プロジェクト、(3) 持続可能性プロジェクト、(4) アート・プロジェクト、(5) 能力開発プロジェクト、(6) ユースオリンピック・フェスティバル2012である。特徴的なのは、この大会の参加資格対象者である若者に親しみやすい活動を通して、教育テーマを達成していこうとすることにある。

たとえば、メディア・ラボではfacebookやtwitterといったソーシャルメディアを通してどうやって自らを理解してもらうか、もっと具体的には「どうやったらtwitterのフォロワー（購読者）を増やせるか」とか「公人としてのオリンピックはfacebookをどのように使うべきか」などといった内容を実技を通して学んでいく。あるいは、TVインタビューの講習では、IOCによって派遣された「アスリート・ロール・モデル（ARM）」と呼ばれるオリンピックたちが、自らの経験を踏まえてインタビューを受ける心得などを伝授していく。そこでは、「スポンサーの社会でのイメージも考慮して自らの振る舞いを考えている」といったかなり現実的なエピソードも紹介されていた。

ワールドマイル・プロジェクトでは、1998年ナガノから始まった「一校一国運動」をモデルに、地元子どもたちが世界中の文化を紹介するブースや、国連やユニセフ、WADA（世界アンチ・ドーピング機構）などがそれぞれの活動を啓発するコーナーも設けられていた。

持続可能性プロジェクトでは、インスブルック周辺の雪山を利用して参加者相互が共同で活動し、相互の理解、自然への理解などを深めるプログラムが行われていた。

個人的に、メディア・ラボと同様にIOCが最も力を入れていると感じたのが能力開発プロジェクトである。シンガポールでも行われたARMと多人数とのセッション（今回は「Meet the Role Model」と名づけられていた）だけでなく、一日の生活の中でさまざまなタスクをどのようにマネージしていくかを学ぶ「Act on your time」や、学業とスポーツをどうバランスさせていくかといったことを学ぶ「Balance your act」では、4～5人のアスリートに対してARMも2～3人、さらにIOCの専門スタッフがサポートするといった非常に密度の濃いコミュニケーションを通して、この世代へのキャリア教育に取り組んでいた。

CEP全体を通して感じたのは、若いアスリートを「ロールモデル」として育てていこうというIOCの明確な意志である。ARMがバズ・ワードのように繰り返し使っていたのは「Real Winner」という言葉である。「メダルを取るだけでは真の勝者ではない」ということを様々なプログラムの中

で ARM が繰り返すことで、若いアスリートたちに社会的責任を自覚しライフスキルを備えたロールモデルとして育てて欲しいという願いが伝わってきた。また、学者が出てきて講義するのではなく、憧れのオリンピック（ARM）が自らの言葉で語ることで、若いアスリートへより効果的に伝わっているのではと感じた。

また、競技面では国や性別を混在させたチームを作り、異なる文化、言語を持ったアスリートが協力して競技を行なうといった新しい取り組みが行われていた。それも、正式なメダルイベントとして行なうことで、単に国際交流という次元を超えて、参加者が真剣に勝負をする場として設定されていることに、IOC が掲げる Olympic Values の尊重がうかがえた。

新種目への挑戦は単に、若いアスリートの育成というだけでなく、IOC としてのマーケティング調査という意味合いも持っていた。すなわち、いくつかの種目は YOG での反応を見て、その後のオリンピック大会での採用を検討していく材料とするのである。このことは、IOC が行なったメディア向けの会見でも明確に述べられていた。

こうした YOG での取り組みを踏まえて日本のスポーツ界の現場を振り返ってみると、参考になることがたくさんあることに気づく。

まず、インターハイや中体連の大会などで地元出身のトップアスリートの協力を得て CEP のようなプログラムを実施することは意義あることだろう。単に学校を休んで競技だけをして帰るのではなく、競技とともに学校では学べない経験をして学校に戻ることで、本人だけでなく周囲への正の影響も期待できる。

また、若年世代のスポーツ離れ、運動部活動離れが問題となっているが、YOG が行なっているように、彼らが興味を示す新競技、新種目への挑戦も必要だろう。YOG ではバスケットボールの 3 on 3 などのストリート・スポーツや、スノースポーツの X-Games 実施種目なども積極的に取り入れている。大規模なチームスポーツだけでなく、それらを少人数化したゲームや、混合チームで争う種目などの採用は、単独校でチームが組みにくくなっているという問題の解決にヒントになるのではないかと。

ユースオリンピックを通して、IOC の柔軟性と貪欲さ、そしてスポーツ界の現状への危機感を強く感じた。



CEP 能力開発プロジェクト
「Balance your time」の様子



CEP 「Meet the Role Model」
の様子

(3) オリンピック教育について

体育系准教授 高橋 義雄

オリンピックでもなければ、特段顕著なスポーツ競技成績もない私が「附属学校オリンピック教育推進委員会」の委員に指名され、とまどいながら初年度の会議に参加させていただきました。筑波大学の前身の東京高等師範学校の校長を務めた嘉納治五郎先生が初代 I O C 委員として活躍し、日本のオリンピック運動を持ち込んだ歴史があるとはいえ、附属学校の体育教員のみなさまはオリンピック教育を突然展開してもらいたいと言われても、まずはその趣旨を自身が理解しなければなりませんし、教育に持ち込むとなれば周囲の先生を説得しなければならないという大変な一年だったのではないかと思います。また附属学校の生徒がオリンピックに出場するわけでもなく、オリンピックはあまり身近でない世界のスポーツ選手の競技をメディアでみるだけのものになっています。さらに東京都が2020 夏季オリンピックの招致をめざしているために、政治的な匂いがしてしまうことも周囲の理解を得られない要因ではないかと思います。いっぽうで附属の特別支援学校の先生は、オリンピックとは別物として発展してきたパラリンピックは生徒や先生自身も係ることがありますので、確固たるパラリンピックの理念をもたれていて、「さあこれからはオリンピック教育です」と言われて違和感を覚えられるのも、これまでの歴史を考えれば当然とも感じました。

オリンピック教育が専門でない私は、委員になったのを機会にしてオリンピズムやオリンピック教育、その唱道者であるクーベルタンについて書かれた文献をいくつか読んでみました。先行研究の結果と考察をここで具体的に触れることはしませんが、オリンピックはオリンピズムという思想を伴う社会運動ですので、附属学校が教育に導入する場合にもオリンピック憲章で明文化された「オリンピズム」をまず理解することが大切になります。しかしオリンピズムのような教育的思想は、特定の時代や地域に生きる人々の文脈から生じていますので、それが現代の附属学校における教育思想として普遍的に利用できるかについては検証が必要になると思います。欲を言えば、附属学校の文脈で読み直したオリンピック教育を提唱するのもよいと思います。明治時代にはじめて西洋から持ち込まれたスポーツに触れた高等教育機関の関係者は、嘉納治五郎先生をはじめ当時の超エリート層でした。スポーツ活動が理想的な日本人を育てる教材であるという意識は強かったのではないのでしょうか。昨今の日本では「体育」と「スポーツ」は違うから「体育」から「スポーツ」を解き放てという議論がなされることがあります。しかしオリンピックは、スポーツ競技を理想的な人づくりのための手段とするオリンピズムという思想を理念とした活動として、非常に「体育」的な営みということができます。附属学校でもオリンピック教育は、生徒の主体的な判断を育てるために、彼らの判断のための基準として用いることのできる具体的な教材として利用できるのではないのでしょうか。

オリンピック教育 講演会記録

前広島市長 秋葉忠利氏
(2010年1月12日 附属中学校)

附属学校が国際教育の一環として推進している「オリンピック教育」に関連して、附属中学校では、卒業生でもある広島市長秋葉忠利氏をお招きし、生徒に対するご講演をお願いしました。ここにその記録を紹介いたします。

(講演記録)

ご紹介をいただきました秋葉でございます。同級生の山崎先生からはたいへん親切なご紹介をいただきましてありがとうございます。

是非今年の8月6日の式典はテレビでご覧になっていただきたいと思います。映像のほうはNHKが撮ると思います。撮るのはNHKですけれども、声がたいへんよく聞こえたら、それは山崎教授が広島市に行って、平和公園の8月6日の式典の音響については陣頭指揮をとってくれているからだというふうにご理解いただければたいへんありがたいと思います。

今日は先ほどお話がありましたように、2020年のオリンピックを広島・長崎でという検討委員会を立ち上げましたので、その内容について簡単にお話いたします。話の長い職業というのは四つか五つあるのですが、政治家、学校の先生、アナウンサー、それから宗教家というので、そのうち私は三つ経験していますので話がどうしても長くなるのです。出来るだけ45分ぐらいで終わるように要領よく紹介させていただきたいと思います。

まず、2020年のオリンピックをなぜ広島・長崎でということ考えたのかという話です。平和市長会議という組織があります。これはちょっと古いですが、全世界の3500の都市が加盟をしています。この平和市長会議というのは世界の市長の集まりなのですが、国の数は134か国地域から参加しています。この市長会議で2020ビジョンという計画を作って取り組んでいるのですけれども、2020年までに核兵器を廃絶しようという取り組みです。このことについては後でまた簡単に説明させていただきます。

その2020年ですが、我々は2020年までの核兵器の廃絶は可能だというふうに思っています。となると、核兵器のない世界が実現すればこれは本当に人類にとって歴史的出来事ですから、そのお祝いをしなくちゃいけない。これは当然考えますよね。そうするとそのお祝いにふさわしい、核兵器の廃絶にふさわしいイベントというのは何だろうと考えたのですが、やはりオリンピックより大きなイベントはないだろうと。たまたま2020年がオリンピックの開催の年ですから、何とかこの二つの夢を一緒に実現できないかなと考えたのが最初です。

その2020年というところに注目したのは、一つは一人でも多くの被爆者が核兵器のない世界と一緒に祝えるような時間設定をする必要がある。実は2020年という目標を作った時に一つだけ批判がありました。それは2003年にこれを作ったのですけれども、被爆者の皆さんからこれはもう端的に言われたのですけれども、2020年なんかは遠すぎると。もっと核兵器廃絶の目標年次を早くしろと、2010年にしろと言われました。聞く必要もなかったのですが、なぜですかと聞いたら、我々は生きてないかもしれないということがありました。今、被爆者の平均年齢は75歳を越えています。

2010年辺りがぎりぎりになるわけです。それからもう一つは、核兵器のない世界をおこすのは私たちの世代の責任だろうということで、これが21世紀の中に入ってしまうと次の世代が我々の世代の遺物の問題を何とか解決したときになって、我々が作った問題を我々が解決したことにはならない、ということもありますので、2020年しかない。しかも今の速さで核兵器を解体し続ければ2019年には全ての核兵器が無くなるという、これは物理的な理由もあります。

皆さんはご存じないかも知れませんが、アメリカもソ連も核兵器はずっと解体し続けています。その速さで2019年には全ての核兵器が無くなるという。ブッシュ大統領の時代には解体すると同時に新しいものをさらに作っていましたので、この解体の速度は落ちましたけれども、それ以前の速さで進めればもっともっと早くなったという事実があります。2020年までに核兵器のない世界の実現が可能だというのはどういうことを根拠に言っているのかと言いますと、一つはオバマ大統領の誕生です。これは分かると思います。後でも出てくるとは思いますけれども、外交の世界でも実は市民参加ということがとても重要になってきている。結果として都市や市民の力が世界を動かしているという事実があります。環境の面でこれがとても大きくなってきているということがお分かりだと思います。

それともう一つは、実は核兵器の廃絶を望む声が世界の圧倒的多数の声なのです。それが残念なことに多数派として認められなかった。少数の人たちの意見のほうがこれは決定的に強い声、世界の大多数はそういうふうを考えているんだといった形で喧伝されてきたために、多数派の声がなかなか力を持たなかったのです。けれども、今はそれが力を持っているということがあります。それから若い世代が全く違う観点からこれを機に参加してくれています。ということで協力態勢がさらに強固になるということ。その上で実現が可能になる。オバマ大統領の言葉を借りれば“YES, WE CAN”ということなのです。

こういうことが背景なのです。けれども、オリンピックを招致するためにはいろいろな課題があります。ですから招致をするということを決めたわけではなくて、招致が出来るかどうか検討する組織を作りましょうということで招致の検討委員会を立ち上げました。最初は、これははっきり言って内輪の勉強会をしますという話ですから、広島と長崎が、これは課題が多くて無理だろうけれどもでも勉強会を始めた、勉強をするのだから温かく見守ってあげようというぐらいのところ、新聞のベタ記事ぐらいで終わると思っていたのですけれども、オリンピックの本当の力が分からなかったことで、たいへん注目をされて、これは嬉しい誤算だったのです。その分、責任もたいへん大きくなりました。

その第1回のオリンピック招致検討委員会は10月31日に開いたのですが、この時は4都市が参加してくれました。広島、長崎、北九州、福岡。福岡市は前にオリンピックの招致に手を挙げていますので、その時の経験を基に、今の市長さんが、福岡はオリンピックの招致はしないということで当選しました。招致委員会の他の都市でやることに協力するというのは言いにくいというので、アドバイザーでいろいろとアイデアをもらっています。ここでいろいろなことを検討し始めたのですけれども、会長は広島市長、副会長が長崎市長。

ここで出てきたのが二つあります。一つは、結果ももちろん大事だけれどもプロセスを大事にしましょう。二つめが出来たら提案型にしましょう。つまり、東京が4千億円用意したから、広島・長崎も4千億円出せるのかという条件を設定して、それがクリア出来るかどうかという受験型の準備をするというのではなく、こちらから、私たちはこういうオリンピックを開きたいが、どうですかということをJOCとかIOCに提案する、そんな取り組みになればいいなということが、第1回の検討委員

会で確認されました。

第2回は12月12日の一月半ぐらいたって開いたのですが、この時は23の自治体が参加しました。4から23ですからたいへん増えたのですけれども、嬉しかったのは、どの都市も広島・長崎がオリンピックを招致するのは素晴らしいと、その理念が平和であるということ、これは最高の形だからみんなで応援して何とか実現するようにしようといった意見が大多数で全ての自治体から出てきました。それから、各自治体は財政的に大変な状況ですので、お金を掛けないオリンピックを提案することでも明確に書けという意見が出てきて、それも書くことにしました。そこに至るまでのいろいろな経過ですけれども、10月11日に検討を行うことを表明して、13日にはJOCに要請して、いろいろな自治体に応援して下さいとお願いにいきました。第2回が12月12日に開催されました。

この第2回の検討委員会でオリンピックの理念、私たちがどういうことを考えているのかというのをまとめました。一つは平和の祭典。これはスポーツの祭典ではありますが、平和の祭典としてのオリンピックをもう一度原点に戻る形で開催できたらいい。それから広島・長崎ということが大事。それから3番目のムーブメントというのは、オリンピック憲章の中にも書いていますし、オリンピックの中心的な考え方なのですが、4年に一度の競技会だけではなくて、世界的な運動を展開するのがオリンピックだと、そういうことが明確に書かれています。それでそのムーブメントの一環として広島・長崎が貢献するということがとても大事だ。これも今回検討委員会を始めてから分かったことなのですから、その重要性もJOCあるいはIOCの皆さんもたいへん強調してくれていますので、これを大事にしないではいけません。これも理念のなかに提案しています。それと新しいオリンピック開催モデルの提案。5番目には検討委員会で何をするかということを決めました。

この中でやはりスポーツ競技をするわけですから、どんな施設を作るのかということなのですが、三つ、現有施設の活用を基本とする。だけど最高の競技環境を提供しますということ。それから市民生活を犠牲にしてまでオリンピックをやることはありませんというのが第2番目です。それと3番目、選手への負担と書いてありますが、選手がいい環境で競技が出来るような施設、あるいは宿泊施設についても、今までの選手村というのは、だいたい民間のマンション業者が作って、オリンピックの間だけそれを貸して終わったらマンションとして売るということなので売れるための配慮はたくさんしてあるのですが、オリンピック期間中の選手への配慮はない建物がほとんどだそうです。ですから選手村が満点をとったような出来ばえではないそうです。それを例えば選手から満点をもらえるようなオリンピック村を作るというようなことも一つのチャレンジとして考えてみる。そのためには、例えば仮設でいいから理想的な環境の選手村を作って、競技が終わったら次のオリンピックに活かして使う、あるいは国体の選手村として使う、いろいろ別の展開を考えるべきだというようなこともこの中に入ってきていますが、それは置いておいて、いちおうこの三つの考え方を決めました。

今後ですけれども、これも実はJOCとの協議はもう始めてるのです。JOCとキャッチボールをするということをしていく。それから出来れば政府に協力してもらう必要がある。後で出てきますが、大阪市長は広島・長崎でないとオリンピックは開かないというようなコンセンサスが日本中に出来て、その結果として、でもそのためにはやはり政府が協力しないといけないでしょうという雰囲気になればいいねということを書いてくれます。それに関連があるのですけれども、世論を喚起するために全国の自治体に呼びかける、同時に先ほど申し上げました平和市長会議への加盟を要請する、これが大事なことです。

応援メッセージの幾つかをご紹介しますが、平松大阪市長は、応援できることは市長冥利に尽きますということをおっしゃっています。大阪市の応援団長1号として応援する。それだけではなくて、

サンフランシスコ、サンパウロ、ミラノ、ブダペスト等 11 の姉妹都市があるのだそうですけれども、オリンピック招致検討への協力、それから平和市長会議への加盟を要請してくれています。今後とも大阪と一緒に広島・長崎のオリンピックのために協力して下さいということを、海外にまで働きかけてくれて大歓迎しています。

それから橋下知事は、2020 年広島・長崎オリンピックというニュースを聞いて、最初お会いしに行ったときには、ここには心が震えましたとありますが、彼は胸にじーンとききましたとおっしゃいました。できる限りの協力を惜しみません。それから浜松市長もこれも全面的に賛成ですということです。

海外からも応援のメッセージをいただきました。今日実はチュニジアのハッシュド大使とお会いして、今日はアフリカの大使の皆さんに平和市長会議の話とオリンピックの話をしてきたのですけれども、このハッシュド大使は広島・長崎が世界にお願いをしてオリンピックを開いてもらうということは間違っていると。逆に世界の人たちが広島と長崎にお願いしてオリンピックを開いてもらうということにしないではいけません。なぜなら世界は広島と長崎に借りがあるということをおっしゃっていました。フランス大使、その他の国の大使にも、広島と長崎がオリンピックを招致するのは素晴らしいという言葉をいただいています。

先ほど申し上げましたように、検討委員会は 22、そしてアドバイザーとして福岡市が入ります。その他に応援委員というのを作ったのですが、現在 49 の自治体に応援しますよというふうにおっしゃっています。皆さんもどこか自治体とコンタクトのある方は是非応援委員に入ってみないかとお誘いいただければありがたいと思います。

先ほど出て来ました平和市長会議、どういうことをやっているのか簡単に説明をさせていただきたいと思います。

平和市長会議というのは 1982 年に、当時の広島市長の荒木さんと長崎市長の本島さんのお二人が作りしました。創設当時はですから加盟都市は二つです。現在 134 か国、先ほど申しましたように地域 3488 都市が加盟しています。会長はずっと広島市長が務めています。

これを見ていただくと分かるのですが、2005 年から加盟都市がたいへん増えています。去年 2009 年は 900 近い都市が加盟しています。今年になってからも既に 90 以上の都市が入ってくれています。5 月の NPT の再検討会議までに何とか 5000 に増やしたい、あと 1500 ぐらい必要なのですけれども、その目標を掲げて努力をしています。

3000 都市の人口全部を足してみると 6 億人。これを基にして考えると 5000 都市になるとだいたい 10 億人の人口を代表することになります。それからもう一つ都市・自治体連合という組織があるのですけれども、これも平和市長会議を応援してくれている組織です。この組織に属している全ての都市の数を合わせると世界人口の過半数になります。ですから圧倒的多数の市民の声を平和市長会議が代表しているということになります。

2004 年から加盟都市が増えたのは実は 2003 年の 10 月に 2020 Vision、当初は核兵器廃絶のための緊急行動と言っていたのですけれども、この計画を作ったからです。その内容は 2020 年までに全ての核兵器を廃絶しようという目標を掲げていますけれども、中間の目標として 2015 年までに核兵器禁止条約を制定しよう。これは世界の NGO が応援してくれている内容です。特に核兵器禁止条約、これをまず何とか実現しようということで、世界の現状は今たいへん大きなうねりを作っています。

写真は 2005 年の NPT の再検討会議です。再検討会議は 5 年おきに開かれるのですけれども、そ

の時、左下が私と伊藤委員長、当時の長崎市長がニューヨークの4万人デモの先頭を歩いているところです。右側がコフィー・アナン事務総長と、白髪の人は、当時の全米市長会議の会長のプラスケリック氏、アクロン市長です。アメリカの市長達もものすごい勢いで我々の目標を支持してくれています。(写真：略)

この取り組みの柱なのですけれども、これは時間がありませんので、いろいろなことをやっています。そのなかで今年特に力を入れたいのは、ヒロシマ・ナガサキ議定書。これは条約の付属文書という形で通常は採択されるのですけれども、これをNPT再検討会議のなかで何らかの形で公的に取り上げてもらいたい。議定書として条約のある意味で改正という手続を踏まなくても国連総会での決議という形でもいいですから、こういった流れが大事だよということを公的に国連のなかで含めて欲しいということで、今各国政府に働きかけをしています。

議定書の中身は核兵器廃絶の道筋を簡単に述べたもので、四つの段階があるのですが、いちばん最初は1980年代の運動が目指した核の凍結です。凍結をして核兵器禁止条約の交渉を始める。2015年にその禁止条約を作って、2020年までに核兵器を廃絶するという筋書きになっています。順序はどいう順序でもいいのですが、交渉開始というのが非常に重要になってきます。

そのなかで特にリーダー的な役割を果たしてくれているのが全米市長会議です。これは人口3万人以上の都市約1200が加盟しているのですけれども、今まで平和市長会議の2020 Visionの賛同決議、いろいろな形が出ていますけれども、4回賛同決議を満場一致で可決してくれています。去年の6月には、いちばん下の二つを見ていただきたいのですが、今年のNPT再検討会議でオバマ大統領が多国間協議を始めます、2020年までにその結果として核兵器廃絶を目指しますという内容のスピーチをして下さいということを、これも満場一致の決議として採択してくれています。ですからアメリカの市長も、オバマさんになってからだいぶ変わってきていますから、この市長さんたちの決議を受けて、今オバマ大統領が行動してくれることを期待しています。もしそうでなければ、市長さんたちははるかに連邦政府よりも、市民の声を代表してもっと進んだ行動をとっているということになります。

通常、国際問題は国の専権事項、地方自治体が口を出すべきことではないという意見がいまだにあるのですけれども、3500もの世界の都市が平和市長会議に加盟しているということには理由があります。これはいろいろな国の市長さんとお話をしているうちに段々分かってきたことなのですが、やはり都市は市民と苦楽を共にしてきた存在です。都市の歴史、これは世界の歴史です。悲劇の歴史なのですが、みんな都市の名前が付いています。ですから悲劇というのは都市レベルでいちばん共有されていることだと思います。それと市民の生命・財産・福祉に直接の責任を持っているのはやはり都市なのです。それと日本の地方自治法でも同じですけれども、市民の声を国とか世界に代弁するという役割を都市は与えられています。それから市民との信頼関係が強い。全て合わせて二度と悲劇を繰り返さないという決意を都市レベルでしているというところがほとんどです。

いちばんいい例がベルギーのイーペルという都市です。イーペルは第一次世界大戦の際にドイツ軍が初めて毒ガス兵器を使った都市です。都市が壊滅的な打撃を受けて、その後戦争が終わってから、戦争前の都市をそのまま復元したということでも有名です。戦争が終わったのが1918年ですから、90年以上たった2008年に90年の記念の式典がありました。それにも招待されて行ってきましたけれども、90年以上たった今でもこのイーペルという都市では、毎日夕方に全ての戦没者の慰霊のための式典をいまだに続けています。広島は年に一度ですけれども、イーペルでは毎日慰霊のための式典をしています。ということはずっと言ってきたのですけれども、つい最近、今朝もそのお寺

の前を通ったのですが、広島のお寺でいまだに毎朝8時15分に鐘をならしている多門院というお寺があります。先日のNHKの行く年来る年のなかで、去年のいちばん最後の鐘をついてくれたのが、この多門院なのですが、その鐘は今朝も聞いてきました。

その3500の都市の中で日本の都市がたいへん重要な役割を果たし始めています。今までは国内と海外と役割分担をして、平和市長会議は海外を担当する、国内は日本非核宣言自治体協議会を作ることになっていたのですが、とにかく全ての都市に入ってもらおうということで、東京都内はそういう形になっています。他のところ、これは広島市のホームページを見れば出ていますので、まだ入っていない都市にお住まいの方がいらっしゃいましたら、ぜひ区長さんでも、町長さんでも、市長さんでも入るようにお勧めいただければありがたいと思います。

先ほども申し上げましたけれども、平和市長会議の活動と同時に被爆体験を未来に伝えることがとても大事だということを痛感して、いろいろな試みをしています。被爆体験がなぜ重要かと言いますと、20世紀最大のニュースになったということからも分かりますように、歴史的な出来事です。それから、被爆体験を活かさなければ人類滅亡する可能性がある。それからもう一つは、これは人類の明日をつくる上でも大事ですが、被爆者の哲学、これは報復ではなく和解だということです。こういう点から非常に重要です。

そのなかで、では被爆者がどういう足跡を残してきたのか。簡単に言いますと、これは1999年の平和宣言の中でまとめてありますので後で読んでいただきたい。被爆直後に生きていることが分かった、分かったけれども結局自殺をしてしまったという被爆者の方がけっこういらっしゃるのです。そういう状況の中でもやはり生きる道を選んだということはとてもたいへんなことだったのです。そこから理解し、見始めないと被爆体験のことは、なかなか分かりません。それをまず見てもらいたい。それから2番目にはそういう地獄のような経験ですから忘れてしまいたいのが当たり前なのですが、その被爆体験を語るということはもう一度心の中で再体験することになります。その痛みを乗り越えて語り続けて、その結果として核兵器の使用を阻止した。長崎以降核兵器は使われていませんけれども、その阻止をしたのは被爆者の功績だった。これは『ヒロシマ』という本を書いたアメリカのジャーナリスト、ジョン・ハーシーが言っていることです。3番目に先ほど申し上げました和解の哲学。こんな思いを他の誰にもさせてはならない。他の誰にもというのは敵も含まれるということで、和解の哲学だということになります。

もう一つ大事なのは、アメリカの哲学者サンタヤーナが言ったことですが「過去を記憶できない者は、その過去を繰り返す運命を背負わされる」。英語で言ったほうが簡単ですから英語で言っておきます。そのほうが覚えやすいと思います。“Those who cannot remember the past are condemned to repeat it” condemned は運命を背負わす、そういうことです。

被爆者が75歳以上になってさまざまな活動が中止されたり、あるいは少なくなってきたりしています。ですから新しい活動が必要になるのですが、下に書いてありますように、広島市では被爆体験継承担当課長という部署を作って、考えられる限りの全ての手段でこの被爆体験を未来に伝えて行こうということであり、お金が続く限り、人が集められる限り、全部のことを今やっています。

その一端が原爆展ですけども。ここにリストしたのは広島市と長崎市が公的に開催をしたものです。これ以外にも宗教団体ですとかNGO等々で原爆展は世界中の至る所で開かれています。国内では緑の所が開かれた所です。これも広島市で公的にお願いをして開いた所ですので、1年に2か所ぐらいのことでなかなか進んでいませんけれども、まだこれも続けたいと思います。

そのなかで特に重要なのは佐々木禎子さん。これは小学校6年生の時に白血病にかかって、生きて

いれば私と同じ年です。小学校6年の時に白血病にかかって中学生の時に亡くなったのですけれども、千羽の折り鶴を折れば自分の願いが叶うということを知り、千羽以上の鶴を折りました。残念ながら病には勝てなかったのですけれども、その佐々木さんの意志を継いで平和な世界を作らなければいけないということで同級生とか全国の中学生がお金を集めて、左にある原爆の子の像というのを作りました。この物語を聞いて、今世界中、毎年10トンの折り鶴が送られてきます。1千万羽ありますけれども、これをなんとか平和の循環を作ることにはしたい。つまりこの折り鶴を広島市で大切にしておいて、そしてこの鶴を折った子供たちが大人になった頃、今度は自分の子供を連れて広島市のそれを見に来てもらう。そこでまた鶴を折ってもらって、今度は一緒に来た子供の子供と一緒に大人になったその人が来てくれるということを実現したいというふうに思っています。

今広島は新しい市民球場を作りましたが、古いほうの球場で1年分の折り鶴を見ることが出来ます。

それと知的な伝達と体系化ということ、先ほど山崎教授からお話があった『広島・長崎講座』というのを世界中に広めようということで大学で講義をしています。下にデジタル化ということが書いてありますけれども、被爆者の話を直接聞いた人はみな感動します。それも時間がたつにしたがって、あるいは間に何人か入ることによって、直接の体験から得られる感動は薄くなるかもしれない。しかしそれを学問的にきちんと整理をして内容がしっかりしていれば、例えば、ユークリッドの昔から今に至るまで三角形の内角の和は180度であるということは変わらないのと同じような正確な伝達の仕方があるのではないかとということで、デジタル化という言葉をつかっていますけれども、そういう形で被爆体験を活かしていきたいというふうに思っています。

この講座は国内28、海外13。早稲田大学がいちばん最初です。これは山崎先生に対する敬意を表しています。早稲田で話したときに言ったのですが、早稲田以外で話すときも早稲田大学が必ずトップにきていますと約束して、今日もその約束を守っているという証拠のためにこれを見ていただいています。

もう一つ大事なことは先ほど申し上げましたけれども、核兵器の廃絶は多数派の声。国連加盟国が192。核不拡散条約の批准国が190。それから非核地帯条約の対象国、119、これも過半数ですね。日本の政府が毎年、核兵器の廃絶決議というのを出しているのですが、それに賛成した国が171。アメリカの世論調査でも6割から7割が核廃絶を支持している。ですから圧倒的多数の声です。

非核地帯を見てもらうと赤で示した所ですけれども、だいたい南半球はもう非核地帯になっています。それを北半球にいかを広げるかというのが課題です。

最後にパラダイムの転換ということをお願いしようと思ったのですが、これだけ説明させて下さい。

パラダイムの転換というのは、天動説から地動説に変わったようなことを言うのですが、今私が説明した平和と市長会議等の動きに見られるのは、報復から和解へという考え方の転換。それから国家だけではなくて都市が重要な役割を果たしている。特に環境の問題がそうですが、アメリカが京都議定書に賛成しませんでしたけれども、アメリカの都市は1000以上の都市が温室化ガスの削減を約束してその計画を実践しています。全ての都市がそういう目標を達成してしまえば、国が何もやらなくても国がやったのと同じ世界的な効果ができるとということで、国家も大切なのですが都市の役割が大きい。それから専門家任せだったさまざまな動きが、市民が主体の動きになってきた。イデオロギー主導、これも核兵器廃絶というのはどちらかというと左の人たちがやることだというような概念がありましたけれども、今やアメリカの共和党、民主党の市長さんたちもそろって核兵器廃絶に努力をして

いるということで、人間中心のこういった動きが世界中を覆い始めている。それから少数派意識、世界の大多数であったにもかかわらず、多数派ではないという意識を植えつけられてきた人たちが、実は自分たちが多数派であるということに気づいて自信を持って世界を動かし始めている。これは環境の問題がやはり同じようなことでお分かりいただけると思います。

あとはもう時間がありませんので説明は全て省かせていただきますけれども、こういったことで最後にオバマ大統領、是非、頑張ってください。

具体的に何をすればいいのか。例えば、広島・長崎オリンピックや2020 Vision をブログ、メール、チャットで紹介する。良い本を読む・良い映画を観る。これはもう言わずもがなです。署名運動もいろいろなところでやっていますのでご協力いただきたいと思いますし、区議町さんに市長会議に入っていただくように呼びかけていただく。それからもう加盟している所は市長さんや議員を激励し、いろいろなイベントの提案をして、そのイベントを是非やっていただきたいと思います。最後に寄附をしていただくには幾らでも構いません。ボランティアとしていろいろな所で活動していただくことも出来ると思います。これも宜しく願いいたします。

2020年までに、とにかくオリンピックを開催する。その前提として核兵器廃絶を是非実現したいということでご協力をお願いしたいと思います。

最後に映画『渚にて』。これは1959年に出来た映画ですけれども、最後のシーンで、救世軍が途中で出てくるのですが、人類が絶滅してもキリスト教に改宗すればまだ救われますよ、あなたの魂は救われます。その改宗するための時間はまだありますよという、“There Is Still Time, Brother.”と出てくるのですが、映画のいちばん最後のシーンは人類が滅亡してしまった後のメルボルンに、この横断幕がはためているというシーンです。これは観客に向かってです。映画のなかでは人類は滅亡したけれども、現実にはまだ時間があるから、その時間をうまく使いましょうというメッセージをこれは伝えているのです。私は高校生の時にこの映画を観ました。その映画を観て、まだ時間があるから頑張ろうということで、結局それでいろいろな縁があって広島市長として頑張っていますけれども、原点の一つはこのまだ時間があるという、『渚にて』という映画です。映画を勧める理由の一つはここにあります。

ご清聴ありがとうございました。

附属学校オリンピック教育推進専門委員（平成 23 年度）

坪田 耕三 附属学校教育局教授（教育長特別補佐）

真田 久 体育系教授

高橋 義雄 体育系准教授

鷺見 辰美 附属小学校教諭

長岡 樹 附属中学校教諭

中塚 義実 附属高等学校教諭

横尾 智治 附属駒場中・高等学校教諭

平田 佳弘 附属坂戸高等学校教諭

寺西 真人 附属視覚特別支援学校教諭

苦瓜 道代 附属聴覚特別支援学校教諭

遠藤 絵美 附属大塚特別支援学校教諭

花岡 勇太 附属桐が丘特別支援学校教諭

松本 末男 附属久里浜特別支援学校副校長

附属学校におけるオリンピック教育推進専門委員会設置要項

平成23年3月1日
附属学校教育局教育長決定

(趣旨)

- 1 附属学校国際教育推進委員会設置要項（平成20年4月25日、附属学校教育局教育長決定）6の規定に基づき、附属学校における国際平和教育としてのオリンピック教育を推進するため、附属学校におけるオリンピック教育推進専門委員会（以下「専門委員会」という。）を設置する。

(任務)

- 2 専門委員会は、次に掲げる事項を行う。
 - ① 附属学校におけるオリンピック教育の企画・立案に関すること。
 - ② オリンピック教育プラットフォーム事務局との連絡調整に関すること。
 - ③ その他、附属学校におけるオリンピック教育に関すること。

(組織)

- 3 委員会は、次に掲げる委員で組織する。
 - ① 附属学校教育局教育長特別補佐（教育長が指名する者）
 - ② 附属学校長が推薦する附属学校教員 各1人
 - ③ その他附属学校教育局教育長が指名する者 若干人

(委員長等)

- 4 専門委員会に委員長を置き、前項第1号の者をもって充てる。
 - (2) 委員会に副委員長を置き、委員長が委員のうちから指名する。
 - (3) 委員長は、委員会を主宰する。
 - (4) 副委員長は、委員長を補佐し委員長に事故があるときには、その職務を代行する。

(委員の任期)

- 5 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。
 - (2) 前項の規定にかかわらず、任期の終期は、委員となる日の属する年度の末日とする。

(事務)

- 6 委員会に関する事務は、附属学校教育局学校支援課が行う。

附 記

この要項は、平成23年4月1日から実施する。

